
シューズウォーズ

傘男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シューズウォーズ

【Nコード】

N0060L

【作者名】

傘男

【あらすじ】

世界の裏で活動する謎の組織、変人学者、地球の全ての電化製品をコントロールするコンピュータ、宇宙の真の歴史、そしてとある靴、靴、靴。

この世の秘密が絡み合う、謎が謎を呼ぶSFストーリー。

プロローグ1、1995年

1995年12月26日2時頃。

アメリカのとある街のとある二階建ての、一軒家の二階の最南にある玩具の散らかった子供部屋。窓を開けた音と、誰かが床に足をついた音とで7歳のケイト・リースは、馬車で宇宙を巡るという素敵な夢から目覚めた。

ケイトは目の前で何かを探しているように、部屋を見渡す知らない人が誰なのかを考えた。そしてすぐに答に辿り着く、そうだ、間違いない。

「サンタさん？」

その人は初めて気付いたように、ベッドから跳ね起きたケイトの方を向いた。

「ああ、そうだよ、よくわかったね」

まるで神様のようなとっても優しい声。

「サンタさんって意外と若いんだね」

今や興奮してばっちり目の覚めきったケイトがその人に一步步みよりに言った。本当に若い、多分まだ男なら少年、女なら少女と呼ばれるような歳だろう。顔はなぜかよく見えない、なぜか白い、眩しい。

「君の名前は？」

「け、ケイトです、ケイト・リースです」

突然に名前を聞かれ慌てて答えるケイト。

「そうか、邪魔したねケイト。サンタは本当は子供を起こしちゃいけないんだけどね、どうやら僕はまだまだ未熟みたいだよ」

「ねえ、も…し」

目は完全に覚めていたはずなのにいつの間にかまた急激な眠気に晒されていたケイトはその場で眠り倒れてしまった。サンタさんは彼女をベッドに寝かせてあげてから一言だけ言葉を残して去って言った。

「おやすみ、ケイト」

それから15年と数カ月後、成長したケイトは一軒家でも、夢の国でもなく、太平洋の遙か深海に作られた、ある巨大な施設の巨大なコンピュータールームの中にいた。

ファースト - プロローグ2、シンプルな靴

「ああ、よく来たな由希」

17歳、高校2年生の藤原由希^{フジワラ ユキ}は、今までバイトという物をした事がないが、それでもバイト中の店に知り合いが来た時、このように普通に反応するのは常識的に考えて、いけない事だと知っている。

「そうか、お前もついに靴の素晴らしさ、奥深さ、かつこよさに気付いたんだな、俺は嬉しい、本「そうゆう訳じゃないよ」

苦笑いしながらも友人の言葉をあつさり遮る由希。まったくこの元気な友人、木嶋^{キシマ カケル} 翔ときたら本当に疲れる。やたらと靴マニアな彼はわりとその趣味を押し付け気味で、それ以外の事では、なぜか気が合う由希には特にうるさいのである。しかし確かに気は合い、基本的には一緒にいると楽しい奴なので、友人関係自体には不満はない。しかしやはりひどく疲れる。

「こうゆう事」と右足を少し上げて指差す由希。
「なるほどな」

明らかに拍子抜けた感じで納得する翔。

つまりは由希の靴には穴が出来ていたのである。それで新しい靴をこの靴屋に買いに来たという訳だ。

「あんまり飾らない感じの、一色のシンプルな紐靴がいい」

翔が何か言う前に自分の希望を口早に言う由希。

「シンプルな感じねえ」

店を見渡しながらか少しだけ考えに老ける翔。

「まあシンプルな紐靴ならあの棚にたくさんあるよ」

そう言つて翔が指差した棚には、確かに由希が求めている感じの靴がたくさんあった。

「この靴」

軽く棚を見てから由希は一つの灰色の紐靴を手に取り呟いた。

「その靴がいいのか？ やっぱお前変わってるな」

「あんたには言われなくなかったよ」と軽口をたたきながらも由希はその靴から目が離せなかった。

何故だろう、棚の他の靴とこの靴は何か違うのだろうか、違う、何かを感じる、なぜかこの靴には妙に惹かれる。

「この靴にするよ」

言いながらも由希はこの靴に自分が惹かれる理由を考える。値段とは違う、別にこの靴は特別高い訳でも安い訳でもない、3500円、靴には詳しくないが多分普通の値段だ、もしかしたら安いかもしれない。色？それも違う、自分の好きな色は灰色ではない、灰色は多分ベスト3にも入らない。

結局はつきりとした答は浮かばないまま由希は家へと帰って行った。彼がその存在すら知らない遠く離れた巨大コンピュータールームで、ケイトという女性が頭を悩ましている、あるとんでもない事態を彼はまだ知らない。この時はまだ知る由もない。

ファースト - プロローグ2、シンプルな靴（後書き）

プロローグ終わり

ファースト - 1、靴の常識

地球の電子機械、というより電気の認識についてほとんどの人は騙されている。常識として知っている事も、子供時代に学校の理科で教わる事も、科学者と呼ばれる者達がテレビで解説してくれる事も、電気に関して世間に伝わっている事は全て何もかも嘘っぱちである。

それがいつ頃なのかケイトは知らない。ただいつ頃からか物質の構成を保つ仕組みの一つを何人かのアメリカ人が発見した。それがストック空間。その一部だけはすぐに仕組みを理解し利用する事が出来た。早い話がつまり世界の電気を全て本質の上で自在にコントロールする術を一部の人だけが得たのである。それがやがて電子技術をこっそりと支配する唯一の絶対的マザーコンピュータ、ミーザの設立に繋がったという訳だ。

このコンピュータ、ミーザが出来る事は実に多種多様でまさに神的だが実はそれ自体の管理はあまり複雑ではなかった。それは優秀なコンピュータ技師が一人で管理出来るレベルなのだ。実際今の管理者もたった一人の女性である。それが22歳のケイト・リースだった。

「どうやら賭けは私の勝ちだねケイト」

かなりむかつく悪どい笑顔で勝ち誇る白髪の男、エイリス・チョーカ。彼はケイトの所属する政府機関プロジェクトクラウドの現ボスであり、ケイトがなる前のミーザ管理人だった男である。

賭けとは今から2月前、ミーザの管理人をケイトが引き継いだ時に行った賭けで、それは「ケイトがこの仕事について半年以内に一人ではどうにも困った事態が起き、エイリスに助けを求めるかどうか」という内容で、エイリスは当然ケイトが自分に助けを求めに来る方に賭け、それが見事に当たったという訳である。

「いーや、賭けは完全に無効よ、エイリス、先に言っておくけど私

は別にここの孤独生活に発狂した訳でも、多忙な毎日に嫌気が差してとち狂った訳でもないわよ。うん、私は正気よ、そしてその上で言うわ」

ケイトの次の言葉、つまり彼女が、というか人類が直面している事態について彼女が短い一言で語った時、あまりのショックで、世界でも数える程度しかいないくらいレベルの頭が混乱する前に、エイリスは無駄に長い彼女の前置きの意図をまず理解した。確かにあらかじめ彼女が正常な事を聞いていなければ、自分は彼女を問答無用で精神病院にぶち込んだ事だろう。いや待てよ、もしかしたらおかしいのは自分の方かも知れない、はは、なるほど、そうゆう事が私ももう52歳、少しかり早過ぎると思うが、どうやらボケが来てしまったという事だろう、悲しい事だ。

「すまない、もう一度、ボケ老人にもわかるようにゆっくりはつきりと言ってくれ」

ケイトはため息をついてから、再び思わず現実逃避に走ってしまうような驚愕の事態を告げた。

「だから、ミーザがいかれちゃったの」

「ただいま」

家の玄関を開けると同時に発した由希の声に返事はない。ちょっとだけ不安になったりもしたが、ソファアに置かれていた手紙を見つけた時、由希は全てを理解した。もはや確認するまでもないのだが、一応開いて確認するとやはりそうだった。彼の家族である両親と姉は泊まりがけで、海外旅行に出かけていたのである。

いったい全体なんて家族だ、息子をほって勝手に旅行に行くなんてなどとは由希は別に思わない。というかいつもの事だ。やっぱりとんでもない家族である。

ソファアに寝転び天井を見上げ冷静に考えるとまた少し不安になる。いや、別に大丈夫、俺は学校があるからしょうがないのさ、うん、決して嫌われてる訳じゃないさ。自分に強く、ただし内容は情けな

いが、とにかく言い聞かせながらも、由希は立ち上がり、さっき買ったばかりの靴を箱から取り出した。

やっぱり今も同じだ、何かを感じる。でもそれが何かは考えてもどうしてもわからなかった。

と突然トントンと玄関をノックする音が聞こえた。

お客さん？

由希は新品の綺麗な靴をソファーに置き玄関に向かおうとした。しかしその足は途中で止まった。とある声に反応しての事だ。

「出ない方がいい」

え？

由希は思わず振り向く、と同時にまたノックの音が響いた。

「だから出ない方が、というか出るな」

今度こそ玄関に出ようとする由希を今度こそ完全に硬直させる謎の声。

定期的にノックの音だけが聞こえるしばらくの沈黙、そしてとうとうノックの音も完全になくなってから由希は（多分）謎の声主であろうソファーの靴を手に取り、自分の目線まで持ち上げて言った。

「あんた何なんだ？」

問いに対して返事は一応帰ってきたが、あまり期待していた答ではなかった。というより軽く不意をつかれた。

「何だと思う？」

真剣に考えていいのだろうか？などと思いながらも真剣に考える由希。しかし答はどう考えても1つしかない。

「靴？」

それが正解かどうか靴は別に答えなかった。当たり前である、靴が喋らないという事なんて幼稚園児でも知っている。

「だと思っただろう」

楽しそうにそう言った、それまでの謎の声の本当の主は、なんとソファーを突き破って出てきた。

全身真っ黒な服に身を包んだその青年は、見た目だけではどうにも判断しにくい^が、とりあえず頭はあまりよくなさそうだなと由希は真っ先に思った。

ファースト - 2、悪と正義の秘密組織

どうやって密閉状態のはずのソファアの中に入ってたんだ？黒服青年を見て最初にそんな疑問が浮かんた由希はおかしいだろうか？こんな場面に遭遇する人などそうはいないだろうから、それはちょっとわからない。

「僕は、本名は明かせないけど基本的にはファイって名乗ってる。悪の秘密組織、ホットのエージェントで、ここにはある極秘任務で来たんだ」

何も聞いていないのに、勝手にべらべらと自己紹介を始める自称、悪の秘密組織のエージェント。やはり馬鹿なのだろうか？

「極秘任務ってどんなの？」

自分はロマンの口の字も知らないような常識人だと、ついさつき靴に語りかけるまで思っていた由希は、もうすでに呆れ切っていたが、一応は目の前のエージェント君に、暇つぶしの意図も兼ね、付き合っただけの事にした。

「簡単な事さ、君の護衛だよ。さあ今は説明してる時間も惜しい、さっさと行くよ」

とは言うがそれだけでは、由希には全然状況が掴めない。

「いやいや、意味不明なんだけど、俺って誰かに狙われてんの？しかも普通守ってくれるなら正義の組織じゃないの？」

「うん、まあ、組織に関しての正義たら、悪たらってのは基本かつこつけてるだけだから別に気にしなくていいよ。アメリカじゃ普通に常識だぜ」

いや、そうなの？

別にどうでもいい事なので口には出さない由希の疑問。

「で、本題の質問だけど君はズバリ狙われてるんだ。理由はその靴」
言いながらも、まだ由希の手に握られたままだった靴を指差すファ
イ。

「その靴が何なのかは実は僕らの組織もわかってないんだよ。わかつてるのは正義の組織、アイス、つまり僕らホットの敵なんだけどね、とにかくそいつらがその靴と、そしてその靴に選ばれし者、まあ君だね、を狙ってるって事。奴らが君を殺してその靴も処分する気なのか、それとも君を生かしたまま捕まえ、靴も無事な状態で欲しいのかはわからない。でもいずれにしても、どうせ奴らのやる事なんて僕らの気に入らない事ばかりだから、奴らの狙い、君を奴らから守る為に僕が派遣されたって訳さ、それが奴らの企みを潰す事になるんだからね」

「じゃあさつきノックしてたのはそのアイスの方の人って事なの？」
由希の質問にすぐさま頷くファイ。

「その通りだよ、ここに入って来なかった理由はいろいろ複雑な事情なんで説明は省かせてもらっよ。僕らにはそれぞれ守るべきポリシーがあつてね、強引に家宅訪問するのは奴らの主義に反するって訳さ」

アイスとかいう組織の人が家に押し入らなかった理由の説明は省くと言ったにも関わらず、しっかりと説明してくれたファイ。

「ところで俺が靴を手に入れたのはついさっきだけどあんた達来るの早すぎない？」

「一般市民ならではの質問だね、簡単に言つと君が知ってるよりも世界はもうずいぶんハイテクなのさ」

由希は少しファイの話を信じ始めていた。確かに突拍子はないし、ファイ自体も変な奴だと感じていたが、なぜか彼は嘘をほとんどついてないように思えた。

「さつ、後は移動しながら話そう、早くここは離れた方がいい」
そう言つて家の裏口の扉のところに手をかけるファイ。

「悪いけど遠慮しとくよ、あんた、当たり前のように裏口が分かつてたみたいだし。それにこの近辺の人はみんな、すごい心配性でいつも困らされるんだけど、こうゆう時は頼りになるんだ。あんたがソファアーを、細工したマジック用ソファアーに取り替えたっていう

俺の考えが正しかったらの話だけど、その人達の誰も来ないって事は、怪しい奴が不法侵入してソファアを一つまるまる取り替えられるくらいの、安全なタイミングをあんたはよく知ってたって訳だし、ちよつと信用するには不気味だからさ」

「へえ」と目を細め口元を少し緩めるファイ。

「じゃあどうする気だい？一人で逃げるかい？」

微妙に少しだけ低くなったファイの声、さっきまでのどこかふざけた感じも消えていた。

「ひとまずはここにいろよ、あんたが俺を連れだそうとしてるとしたら、この家の中じゃあんたは何も出来ないって事っぽいし。ノックした人達も、俺を狙ってる人達として、あんたの言う通りなら、やっぱりこの家なら安全っぽいし」

そして靴を持ったままソファアの破れていない部分に腰掛けて一息つく由希。ファイは何かを考え込むように黙り込んだ。その顔はちよつと不満そうでもあった。

「確かにいかれてるな」

そう判断するのは簡単だった、単に接続されるべき所で接続されないだけだ。

「案外冷静ね」

「まあ私も伊達に歳はとってない、この程度の事実受け入れられるさ。」

「前言撤回」

明らかにエイリスの声は動揺していた。

「いつまでのプログラムが入ってる？」エイリスの問い。

ミーザは基本的に予約制で行動を決めれるようになってる。

「明日の17時まで」

「なるほど」

とすると今、世界の電子機器に何も異常がないという事は、プログラムが予約されている間、つまり明日17時まではまだ大丈夫だと

いう事だろう。だがそれから後は…、

エイリスは何が起きるかを考える。実際その時にならなければ何が起こるのか正確にはわからない。ただ世界がもう、これまでと同じ世界でいられないのは確かだ。

「絶望に暮れてる暇なんてないわエイリス、今人類の築いてきた偉大な文明のひとつが崩れようとしてる、そしてそれを阻止出来る位置にいるのは私達2人だけ。なら話は簡単、阻止してやるまでよ。こんな危機にあっさり負ける人類じゃないわ」

力強いケイトの言葉にエイリスも吹っ切れたようにニヤリとした。

「そうだな、では一緒に救世主になろうか」

しかし彼らが救世主になるまでもなく、わりとすぐにこの危機は終わりを告げる事となる。

「その靴を今すぐ手放せば」

唐突に沈黙を破るファイ。

「多分君は大丈夫だよ、これは絶対本当だぜ」

由希は別にこんな灰色に思い入れも何もない。

「うっん」

自分はどうかしてしまっただのか？正直よくわからない。

「それは出来ない」

間違いなくこの靴と自分の間には何かある、由希は完全に核心した。

ファースト - 3、コードネーム、サリー

とある場所のとある昼下がり、悪（？）の秘密組織、ホットの構成員の一人、コードネーム、サリーとはあるカフェで一人くつろいでいた。

「うーん」

最高級の…、名前は忘れてしまったが、とにかく最高級のコーヒーの香りにうっとりするサリー。

店に流れる上品な印象のクラシック音楽、窓から見える真っ白で巨大な噴水に、群がる白い数羽の鳥。幸せそうに手を繋ぎ微笑み合っている、道行く家族、恋人達。

「うーん」

再び深くうっとりするサリー。

なんて素敵な時間だろう、今以上、こんな幸福はないわ。だからこそ彼女は通信機に入っていた緊急の指令をとてつもなく無視したい気分にかられていた。

「はあ」

でも仕方がない。私が組織に背いたら、困るのは私だけじゃない。そう、あの人。私が1番大切な彼の立場も危ういのだ。

「しょうがないわよね」

サリーは立ち上がり店を出た。

「ねえ、直ったわ」

ケイトは自分でもちよっと信じられなかったが、それは間違いなかった。

別に何かした訳ではない、つまりケイトが直した訳ではない。ミィザの故障は何もしなくても勝手に直ったのだ。

「信じられんな、何が起こっていたんだ？」

エイリスの疑問は最もである。

ミーザが正常に戻ったのは、ケイトがエイリスを呼んでから、ちょうど2時間後くらいの事だった。

「で、いつまでここにいてるつもり？」

「外に出たらあんた俺を捕まえるんだろ？」

「まあそうなんだけどね」

そんなこんなで由希とファイは一緒にテレビゲームを楽しんでいた。ある有名なレースゲームだ。

「うわっと」

画面内を走る自分の車が、もう少しで巨大トラックにぶつかる所だった、肩を震わせ声をあげるファイ。完全にゲームに入り込んでいる。

「また負けた」とかなり悔しそうな由希。

それはそうだ、友人間で最強の実力を誇るゲームで、あまり経験がないという奴に絶賛5連敗中なのだから。

「なに普通に仲良くなってるのよ」突然の新たな不法侵入者の声に振り向く由希とファイ。

「サ…」

ファイが何か言ったが由希にはよく聞こえていなかった。それどころではなかった。

由希にとつての異性の最大の理想系、信じられないほどに、まるで天使様のような女の子がそこには立っていたのである。

「までは大袈裟かな、ちょっと。かなりかな」

でもその人が由希にとってすっごくかわいいのは間違いないかった。

「ファイの知り合い？」

平常心を装いながらも、ファイに尋ねる由希。

「んん、知り合いつていうか「私はサリー、そいつの仲間よ」

ファイを遮り、そう言ったサリーの右手の人差し指はファイを指していたが、いつからそうしているのかは、サリーの顔ばかり見ていた由希にはわからなかった。

「恋人でもあるわ」

由希の中の何かが崩れ、彼は膝をついた。

しかし一瞬で立ち上がる由希、その時にはもう完全に彼女、サリーの事は吹っ切れていた。なぜなら由希は見た目より中身を重んじるタイプだからだ。悪の秘密組織のエージェントうんぬん言ってるイタイ奴の仲間って時点でお断りなのである。

でもやっぱりちょっと悲しいので一応ため息だけはついておいた。

「で、あんたも俺とこの靴を狙ってるの？」

「当然ね。だからそのボンクラにはこの際はつきり言っておくわ、この役立たず」

一瞬反省したような様子も見せたファイだったが、すぐに何かに気付いたように顔をあげてかわいい恋人に言い返した。

「でもそんないした事態でもないぜ、彼だつてずっとここにはいられないんだし、彼が外に出た時が僕らの勝利の時さ」

由希自身あまり考えなかった事だが、残念ながらまさしくその通りである。この家にずっといる訳にはいかない。

「だからあなたはボンクラなの。そんなんじゃ時間がかかるじゃない、効率悪いわ」

「じゃあどうしろって言っただよ」

この先の展開が若干読めてしまった由希は、自分のその予想が外れてくれるように、とにかくあらゆる神に祈れるだけ祈ったが、その熱い想いは届かなかった。

「とっても簡単、ようは彼がこの家にいるから手が出せない訳でしょ、この家を破壊すれば終わりじゃない」

ファースト - 4、ミゾノ、ルゲーグー!!

「なるほど、そうか、その手があったか」

ファイのその言葉に、もしかしたらファイが止めてくれるかもしれないという、彼があえて家を壊さなかったパターンの可能性も打ち砕かれてしまった。

「そうゆう訳、ちょっと待ってて」

そして一旦どこかに行ったサリーは数分ほど帰って来た。どこから手に入れてきたのか、二つのドリルでその両手は塞がっていた。

「ほら、あなたの分」と片方のドリルをファイに手渡すサリー。

それから当然のように、由希に断りも入れず、家の破壊活動を開始するファイとサリーの二人。これは本当にまずい。絶対まずい。とパニック状態の由希。

こいつらはなぜかは知らないけど家の中にいる時には手を出せない。ハッと気付く由希。そうだ、もうそれしかない、最後の賭けだ。

「うああ」と唐突に手と胸を押さえて、その場に片膝をつく由希。

ファイもサリーも破壊活動を一旦辞め、何事かと振り向く。

「うう、クルックが」

「クルック？」とファイ。

「家の壁に仕込まれてる俺との身体的連動マシンだよ。今ので壊れたみた…、うう」

しょうもない嘘もいいところである。しかし仕方がない、由希にはもうこれしか手はなかった。そして効果は予想以上だった。

「そんな物が」

別人のように青ざめるサリー。とりあえず演技には見えない。

「ど、どうしよう」

ファイがそう言ったのと、由希がそう思ったのは同時だった。ここまで大袈裟な反応をされると、さすがに由希自身、戸惑ってしまう。「ふう」ととりあえず痛みが引いたふりをする由希。

「そんなに慌てる事なの？」あまりに気になるので聞いてみる由希。
「最悪よ」相変わらず青ざめたサリー。

「掟破りは第一級反逆罪」

「てつまり何なの？」

ファイの言葉に対しての、間髪入れずの由希の疑問。

「死罪」

今やどこか遠くを見つめているサリーのこの短い説明で、由希は二人のショックぶりの意味を理解した。

「こうなったら組織の追っ手が来る前に逃げるしかない、行こうサリー」

ファイの言葉にサリーは頷き二人は家の庭へと出て行った。由希はほんの少し迷ったが、すぐに決心し、灰色の靴を履き、二人に続いて外に出てきた。

「ねえ、実はさっきの嘘だつて言ったら」

「もう遅いわよ、私達はもう反逆者として組織からマークされてるの。本当はどうだなんてもう関係ないのよ」

もう泣きそうなサリーを見てさすがにかわいそうになってきた由希。

「あの、ごめん」

「いや、悪いのは僕らさ、自業自得だよ、君を甘く見すぎてたみたいだ」

意外といさぎのいいファイ。

「俺はまだ狙われるの？」

「ええ、ホットからもアイスからも、あなたが捕まるまで、まだまだ刺客は来るでしょうね」

由希はまたひとつ決心をした。それならいっそ、

「俺もついて行っていい？」

「エイリス、メモリーの中に知らないデータが紛れ込んでたわ」
またしても驚くべき事態だった。知らないデータが入り込んでいるなら、それは十中八九、ケイト達の知らないどこかの誰かがミーザ

にハッキングを行ったという事である。しかしそれは根本的にミーザにコントロールされている、地球のコンピュータでは絶対にありえない。

「どんなデータだ？」

エイリスはもうあまり驚きもせず冷静に尋ねた。

「これは文字データ。ブロックされてるけど必ず解くわ」と言っている間にケイトはデータのプロテクトを外し中身を開いた。

「この言葉知ってる？」

「見た事もないな」

ケイトの問いと即答するエイリス。

モニターに映し出されたのはケイト達の知らない謎の言語の文章だった。ただ所々によく知っているアラビア数字か、もしくはそれと非常に似た文字があった。

「1、2、360で終わってるが、それまでの数字は全部あるな」

まさにエイリスの言う通り、それは謎の言語を挟みながら1から360まで並んでいた。

「円」とケイト。

確かに円の角度は360度なので、この文章の数字がそれを指す可能性は十分ある。

「これは？」

「私も気付いたわ、ちょっと待ってて」

そしてケイトは素早い手つきでミーザを操作し、データを少しいじった。

「やはりそうなのか」エイリスの呟き。

文章の内容自体はさっきとまったく変わっていない。たださっきと違い、数字の167が赤くなり強調されていた。

「むしろ歓迎だよ、君はそれなりに賢いから、一緒に来てくれたら頼りになる可能性が高いしね」

ファイのちよつと意外なそんな言葉。

「ええ、一緒に行きましょう、よろしくね由希」

サリーの笑顔に由希はドキっとしながらも、照れる顔をごまかすように言った。

「ああ、よろしく」

それからサリーが懐中時計のような機械をポケットから出して軽く触ると、新幹線の1番前の車両の前半分だけを取り、真っ黒に染めたような乗り物が庭に出現した。

「これはミゾノって言うんだけど、まあ潜水艦にも飛行機にも、いざって時には宇宙船にもなる万能乗り物さ、さ、君も乗って」

ファイの言葉通り、二人と一緒にそのミゾノとかいうその乗り物に乗り込む由希。

ミゾノの内部は意外と広く快適だった。そしてそれは凄まじく速かった。

「着いたよ、ひとまずの隠れ家、僕の家だ」

ファイがそう言ったのは、三人がそのミゾノに乗ってわずか数分後だった。それは音も揺れもない高速移動だった。

「ああ、靴は別に脱がなくていいぜ」

ミゾノを出てのファイの第一声。

「どういう事かはやっぱり数字以外の部分の言語を解読するしかないんじゃない」

しばらく二人、頭を悩ませた後のケイトの結論。

「そうだな、とりあえず知り合いの言語学者に当たるだけ当たってみるか」

エイリスのその言葉に、ケイトはすぐさま呆れたようなため息をついた。

「ねえ、そんなたくさん友達いますみたいな言い方やめてくれる。

私達の知り合いの言語学者なんて」

「ああ一人だな、では善は急げだ、すぐ呼ぼう」

どこかの砂漠にぽつんとそびえ立つファイの家は、外からの見かけだなんて事のない、砂漠ではおかしいだろうが、とにかくただの木製の家だが中はとにかく凄かった。

家に入って最初の部屋から、巨大な地下空間の1番奥まで、見た事もないような謎のマシンが並ぶ、由希のような一般人には映画で見えないような光景が広がっていた。

ファイはすぐに巨大なコンピュータのひとつを慣れた手つきで操作し、モニターに検索サイトのような画面を出した。そして、（ファイ、またはサリーへの追っ手）、と入力しすぐ横の青いボタンを押した。

（任務は困難、安心していい）と画面に映し出される。

「凄いマシン」 呆気にとられ呟く由希。

「凄いでしょ、ルグーグって言うのよ」

「俺もちよつとこれ使っていい？」

サリーが教えてくれたマシンの名前に軽く吹きそうになりながらも、ある事がずっと気になっていた由希は聞いてみた。

「いいぜ、ここのキーボードで調べたい事を入力して、隣の青ボタンを押すだけさ。ああ、キーワードはびっくりするくらい抽象的でオーケーだぜ」

由希はその通りに気になる事を入力した。

（藤原勇子とその両親がいつ家に帰ってくるのか）

勇子^{ユウコ}は由希の姉、そして由希は自分の両親の、名前は知っているが漢字を知らなかった。

「そんな」

結果を見ていつかのサリーより遥かにひどく青ざめる由希。

（帰って来る事はない、残念ながら彼女らは間もなく死ぬ）

ファースト - 4、ミソノ、ルゲーグー!! (後書き)

自分で書いてて一番面白かった。

ファースト - 5、愛のため

由希には信じられないだろうが、翔は中学までの義務教育の9年間、ずっと人付き合いが下手な内気な少年だった。そんな彼は高校生になって由希と出会い、そしてすぐに仲良くなった。

最初に由希と出会った時、翔は彼に似た物を感じたが、二人には決定的に違う点があった。それは由希には友達が多く、クラスからも孤立していなかった事である。由希も翔も周りの同世代の人達とは話題や、興味の対象がずいぶんとズレていた。同級生達は漫画か異性が芸能人の話ばかりだったが、二人は小説や科学の話で盛り上がった。しかし由希はそんな趣味の合う友達以外の人達とも普通に接し、うまく立ち回っていたのである。

絶対に口にはださないけど、翔はそんな由希の事を尊敬さえしていた。

だから何としても彼には靴の素晴らしさ、奥深さ、かっこよさに気付けて欲しい…。

「由希」

インターホンを押しても反応がなかったので、大声で名前を叫ぶ翔。

「由希」

しばらく待っても反応がなかったのもう一度叫んでみる。が、やはり反応はない。

由希どころか誰もいないと理解した翔は、いつもなら帰る所だが、なぜか妙に気になったので少しだけ家の中を見てみた。そしてどう見ても、人為的に破壊しようとしたが、途中で辞めた物とは思えない跡を見つけてしまう。

「まさかな」

翔はそれほど驚きもせず、ただ不安そうに呟いた。

「これは絶対なの？」独り言のような由希の問い。

「ただの予測よ、変える事は出来るわ」

「どうしても変えたい」

サリーの言葉にすぐさま活気を取り戻した由希は顔を上げ言った。

「とりあえず詳細をもう少し詳しく見てみよう」

そう言つてファイはキーボードのすぐ横のレバーを倒してから、青いボタンを再度押した。

（彼女達は現在、オーストラリア行きの民間飛行機に乗っている、残り12分、地球座標ポイント624221AにおいてDSAに突入）

表示されたポイントやらなんたらは由希には意味がわからなかったが、ファイやサリーはよく理解出来た様子だった。

「助ける事は出来るかも知れないわ」とサリー。

「なら助けて」

叫ぶ由希。

「正直僕達はあまり動きたくはない、追っ手に間違いなく場所がばれると思う」

「なら助け方を教えて、俺一人でやってみる」

信じられないほど高速で働いていた由希の思考回路は、そんな言葉を考える余地もなく彼に言わせていた。由希はあまりの混乱にもはや自分で何を言っているのかもよく分かっていなかった。

「あなた一人じゃ絶対無理とは言っておくわ」

サリーの冷静なほど冷静な言葉。

「ふざけ……」

言葉も途切れ、息も絶え絶えの由希。

「お願いだ、助けて」

由希の目には今や涙が滲んでいた。

「後1時間ほどで来るそうだ」

「何処の誰が？」

わかっていてもケイトは尋ねた。つまりはそうだと信じたくなかつ

た。

「リヴァース・ブラウニング」とストレートに名前だけを口にする
エイリス。

「なんで？何もここに呼ばなくてもデータ送ればいいだけじゃない」
「本人が直接来ると言い出したんだ、興味津々だよあの小僧」

小僧と言っても、確かにエイリスにとってはそうだろうが、とにかく
クリヴァースはケイトより年上の25歳で、大学時代の先輩だった。
そしてケイトは彼と仲が非常に悪かった。理由はいろいろあるがど
れもしようもない物である。そしてそんな訳で、ケイトは実の所彼
と会いたくなかった。

「でも確かにこの場合は仕方ないしね、妥協しとくわ」
ケイトは諦めそう呟いた。

「勇子ちゃん、よね。その子が大事なのね？」

今にも泣き崩れそうな由希に静かに尋ねるサリー。

「大事だよ、大切な人だ」

何とか言葉を紡ぐ由希。

「愛してるのか？」

今までで1番真顔な顔で、そんな事を唐突に聞くファイ。

「ああ、愛してるよ」

確かに愛してると言える。しかしもちろんこの場合の愛してるとは
家族としてという意味合いであり、男女間での愛してるとはまったく
違う。のだが実はなかなかロマンチストな二人はそうは考えな
かった。

「愛する人の為か、なら仕方ないわね」

「僕だつてなんだかんだで君に危機が迫ったらと思うとアレだしね」
「で、彼女とは両思いなの？」

サリーのこの質問の時点で由希は二人が勘違いしている事を悟った。
「彼女は姉さんだよ」

言いながらも後悔する由希。なぜこんな事を言った？雰囲気からし

て姉さんとは恋仲なのだと言い張れば、二人はやる気を出してくれてたのかも知れないのに。ところが幸運な事に由希の心配はまったく無用だった。

「なんて可哀相な奴なんだ、悲劇だ、そんなに想っている人が姉さんだなんて。どうせ想いは届かない、でもただひたむきに想い続ける、彼女の力になりたい」

ますます勘違いを加速させ、盛り上がるファイ。

「素敵な話…」と心底感動している様子のサリー。

「決まりだな、その一途な気持ちにやられたよ、君は愛する姉さんを助けたい、僕らは仲間としてちよつとでもそんな純粋な君を応援したい、辿り着く目的は1つだ」

「勇子ちゃんのご両親を助けましょう」

予想外ながらも、結果的には由希の望んでいた展開にはなった。

「本当にありがとう」

由希は何もかもが嬉しかった。素敵な出会いをくれた運命に心の底から感謝した。

「でも問題を解決しないと決心した意味はないぜ」

またガラスと雰囲気を変えたファイ。その手はいつの間にか、少し離れた壁の、ルグーグとは違うマシンを凄まじいスピードで操作していた。

「助ける方法は？」

すっかり冷静になった由希の質問。

「いい、まずDSAというのはまだ世間には知られていない、地球の異常気象のひとつよ。とても小さく、だけどとても危険な見えない竜巻ってとこね」

言いながらも、サリーはルグーグの隣のマシンをいじり、そのモニターに空を移動する飛行機と、その進行方向先にあるバツ印の立体映像を映し出す。

「飛行機があなたのお姉さんが乗ってる飛行機、このペケがDSAのポイント、見ての通りこのままじゃ突っ込むわ」

立体映像に指を向け説明するサリー。

「これをなんとか消し去るの？それとも飛行機の進行方向をずらすの？」

尋ねる由希。

「正直消し去るのはあまり利口なやり方とは言えない、進行方向をずらすのはずいぶん現実的だよ、僕らが取る方法もそれさ」

相変わらず謎のマシンを操作中のファイ。

「ずらすってのはどうやって？忍び込んで操縦を変わってもらうの？」

「そんな時間はもうないわ、操縦を変わってもらうのは確かにその通りだけど、方法は直接じゃないわ」

「ここからあの飛行機のコントロールに関する全てのコンピュータにハッキングするんだ。それが今取れる最善の策だよ」

具体的に方法を知っており、そしてそれをちゃんと実行している二人だが、らしくない相当に真剣なその様子に少し由希は不安になる。「さすがに飛行機をコントロールする全てのシステムをこの短期間で乗っ取るのはあんたらでも難しいって訳？」

由希は聞かずにはいらなかった。

「世界があなたの考えている通りの世界なら余裕でしょうね、だけど真実の世界では誰も成し遂げた事のない行いなのよ」

世界、考えている世界、誰も成し遂げた事のない行い。またひどく混乱する由希。

「今は時間がないから詳しくは後で話すわ。そして大丈夫、彼とても優秀なのよ、普段の様子からはとても想像出来ないんだけどね」
由希をなだめるように言葉を紡ぐサリー。

「やっぱりここで」

手を止めるファイ。操作していたマシンにはプログラムソースのようなたくさんの文字。そして右端に入力欄のような空白。

「ごめん由希、やつ……」

ファイも、サリーも何か言っていたようだったが由希は気付いてい

なかった。このデータ。自分はこの羅列を知っている。

「F・A A D G M O A G V、M Y G O D」

「え？」

「由希？」

ファイもサリーも突然にアルファベットを呟く由希に驚いた。

「いいから、F・A A D G M O A G V、M Y G O Dだよ、それがこのコードに足りない羅列だ」

そうだ、理由なんて今はどうでもいい、自分は答を知ってるんだ。なら今は大切な人を助ける為にそれを使うだけだ。

「F・A A D G M O A G V、M Y G O D。いちお……」

言葉を止め、そして由希の方を振り返るファイ。由希自身気持ちはわかるが今は時間がなかった。

「今はとにかく急いで」

その声にファイは気を取り直し再び作業を開始した。

そしてそれからすぐに画面に、由希はそんな物見た事なかったが、飛行機のコントロールに通じる全てのデータが映し出された。

「ここまでやってからは楽勝だぜ、任せて」

さつきまでに比べて、かなり緊張が抜けたファイの声に由希も心底安心した。

「今度はどういう事？」とケイト。

「文字データを入れた奴と同じ犯人ではないだろうな、我々に気付かれた時点で手際が悪すぎる」

エイリスの言葉にケイトも頷く。確かにそうである、前はケイトは何の異常もわからなかった。

「大丈夫、すぐに出てったわ。重要なデータはだいたい書き換えだし、犯人が彼であり彼女であり、とにかく少なくとももう掴んでいる情報だけではミーズには入ってこれないわ」

ケイトはそう言ってひと息ついた。エイリスもひと息つく。ほんの数分間の乗っとり行為だった。

その数分間に微妙に位置を少しずらされた飛行機は、無事に危機ポイントを越え、目的地へと順調に向かっていた。

ファースト - 6、カール・ウェラー

ミーザを作りあげたのはアメリカのとある秘密機関内のわずか5人のチームだった。

その性能は彼らの誰も予測出来なかったほどの物で、その気になれば、バカらしい人もいるのだろうが、世界を征服する事だつて出来るほどだった。5人の内、最も野心の強いヘイリーがそんな事を実際に考え、そしてその為のある計画を立て、実行に移した。その計画の第1段階こそが史上初めて試みられたミーザへのハッキング行為である。結果的にはチームのリーダーだったジャック・リースが仕掛けていた罠に阻まれ、計画は発動する事なく失敗したが、裏切り者のヘイリーは上手く逃げ、姿をくらました。

ヘイリーは仲間を集め、ある組織を作り、ミーザを乗つとる為にあらゆる手を使ったが、それは叶わぬまま彼は帰らぬ人となってしまう。そして彼の作った組織は水面下ではだんだんとミーザへの関心が薄れていたが、ヘイリーが死んだ事で完全にそれが浮き彫りとなった。

しかし大きな目的を失った組織は無意味に存在し続け、やがて2つに分裂し、現在も無意味に存在し続けている。それが秘密組織ホットとアイスである。

「世界がそんなだったなんて」

ミーザの事、ホットとアイスの事を一通り聞いた由希は、何よりそんなバカげた話を何の疑いもなく信じている自分に1番驚いた。

「もう俺は元の考え方には戻れないな」

ファイにも、サリーにも聞こえない小さな声で呟く由希。と、その時警報のような音が家中に響き渡り、由希はひどくドキつとした。

「やっぱり場所がばれたみたい、すぐ逃げようぜ、2人共」

そう言つて立ち上がるファイ。続いてサリー、最後に由希も腰を上

げ、3人は外へと出てミゾノに乗り込んだ。

「何処に行くつもりなの？」

尋ねる由希。

「こうゆう時はとりあえず基本、宇宙ね」とサリィ。

そして彼女のその言葉通りミゾノはあつという間に空を突き抜け、宇宙へと飛び上がった。

「久しぶりだな、エイリス、ケイト」

「よく来てくれたなりヴァース」

到着した友人の言語学者、リヴァース・ブラウニングの挨拶にエイリスは愛想よかったが、ケイトは無愛想に座ったまま黙っていた。

「で、どの文字を解読して欲しい？」

ケイトの事はまったく気にしていない様子のリヴァース。

「これよ」

立ち上がり、そっけなくそう言っただけのミィザの5つある内の1番大きなモニターに謎の文章を表示させるケイト。

「ここに来てよかったよ」

しばらくの沈黙の後、呟くリヴァース。

「そしてお前らは俺を呼んで正解だ。1時間もあれば必ず解読してやる」

自信満々にそう言い切り、リヴァースは持っていた小さなカメラで謎の文章を撮り、持っていたノートパソコンにそれを繋げた。

「もしかしてUFOの正体のいくつかはあんたらみたいなのかも」
もうけっこう遠くに見える地球を眺めながらそんな事を言う由希。

「もしかしてっていうかほぼ間違いないだろうね。ロズウェル事件なんてまさにそうさ、あれは今も研究者の間でも、実は墜落したのは当時極秘だった気球だと考えられてるけど、本当の事言つとその話自体ホットの捏造なのさ。あれ墜落したのはホットの開発した円盤型ジェットなんだぜ」

さりげなく凄い話をかますファイ。由希は最近、その事件に関するドキュメンタリー番組を見て、興味が湧いていたのでちょうどよかった。

「ありがとう」

なんとなく由希はお礼を言っておいたが、ファイもサリーも全然意味がわかっていないようだった。

「それと話は変わるけど、この辺って安全なの？」

「地球に比べると宇宙は遥かに広いから、見つけれにくい事は確かよ」

質問に答えながらも何かのデータを確認するサリー。

「まあ絶対安全なんてのはないさ」とファイ。

「でもいつまでも隠れてるだけでいいの？こっそりずっと暮らすの？」

ファイもサリーも言われて初めてその事実気付いたように、急に真剣な顔となり考え込み始めた。

「今思うと僕もサリーもホットは抜けたんだから、いつまでも決まりを守る必要はないんだよね」

唐突に沈黙を破るファイ。

「それはそうね」

そう言いながらも由希の方を向くサリー。ファイも少し遅れて由希の方を向いた。

「何？」

微妙に怖じけつき1歩後ずさる由希。

「由希、君も自分が狙われてる理由とか知りたいだろ？もしかしたらミーザのセキュリティーパスの不足コードを君が知ってた理由もわかるかも知れないぜ」

ファイの言葉にすぐ頷く由希。ファイもサリーもニヤリとした。

「どの道じつとしてるなんてつまらないしね、アイスの事調べまくってやりましょう」

サリーのその言葉に由希はようやく2人の考えを理解した。

「エイリス、ケイト」

リヴァースの呼ぶ声に駆け寄るケイトとエイリス。

「解読は完了した」

「英語に「直したよ、これだ」

ケイトを遮りながらもノートパソコンの画面を見せるリヴァース。
そこには1度の宇宙、2度の宇宙、…、と最後、360度の宇宙まで並んだ文の後にこうあった。

（計画に必要な角度、167）

「まったく意味がわからんな」

エイリスの言葉にケイトも、そう翻訳したりリヴァース自身も頷いた。

「これ間違いないの？」

意地悪く嫌みつぽく尋ねるケイト。

「お前の管理よりは信用出来るだろうぜ」

大人げない返事を返すリヴァース。

「リ」喧嘩はそこまでだ。お前達もうお互い大人だろう」

エイリスの言葉にケイトもリヴァースも罰が悪そうに黙り込む。

「あれがアイス本部さ。まさか月にあるなんて思わなかったろ？」

それはそうである。アイス本部らしい巨大な建造物はファイの指差す先、月のどこかにそびえ立っていた。

「アポロ計画の時にはもう？」

「あつたのさ、当時はさすがの奴らもプライド捨てて、捏造とかくれんばに定評のあるホットを頼ってきたらしいぜ」

今更すぎるかも知れないが由希は自分の頬をつねってみた。そして別に夢を見ている訳ではないという事をはっきりと理解した。

「角度、宇宙の…」

唐突にぼそぼそと呟くエイリス。

「エイリス？」とケイト。

「そういえば昔…」

エイリスはある人物を思い出していた。いつもおかしい事ばかり言っていた昔の友人。

「どうやら俺もついにサンタになる時が来たらしい。という訳で俺はサンタになるから多分もう君には会えないぜ。あばよ」

そう言い残し本当にどこかに消えてしまった旧友。カール・ウエラ！。

一人暮らしの散らかった家の散らかったとある部屋の端、由希のただの同級生のはずの翔は普段からは考えられないほどの暗い感じで座り込んでいた。

何もかも話が違う。カール、あなたは俺に嘘をついてたのですか？それともあなたは間違っていたのですか？

当たり前だがその心の声が遠く離れた由希やケイト達に届く事はなかった。

ファースト - 6、カール・ウェラー（後書き）

更新出来ないかもと言いつつ更新

ファースト - 7、選ばれし者

「やる事がコンピュータのハッキングなら何でこんな間近まで接近する必要がある訳？」

「バカね、モチベーションを上げる為よ。ほら、ファイだから」

呆れ顔の由希の質問にサリーはそう返し、ハッキングしようと四苦八苦している張本人、ファイを指差した。

「この人、あんたらみたいない人達の間でも変わり者の扱いなの？」

由希のヒソヒソ声に頷きで答えるサリー。

「やっぱりパスワ」

ハットとして一旦由希に振り返るファイ。

「まさかとは思うけどこれわかるかい？アイスのセキュリティのパスワードなんだけど」

由希は少しファイの見ていた画面に近づきよく見てみたが特にパスワードらしい言葉は浮かんでこなかった。

「わからない」

「そうか」

ファイもサリーも、そして由希自身さらに困惑する。ミーザのセキュリティ解除コードの不足部分はわかったのに、今回のホットのそれはわからなかった、という事はおそらくミーザのコードがわかったのは由希の特殊能力とかではなく、単にそれを知っていたという事である可能性が高い。しかし普通に考えて、ミーザの存在すら知らなかった由希がそれを知っているのは奇妙である。

「考えてもわからないね、今は目の前の問題に集中しようぜ」

ファイの言葉に由希もサリーも頷いた。

アメリカ、マサチューセッツ州のハーバード大学、から数キロ離れた所にノキ大学はそびえ立っている。そしてケイトはそのノキ大学を尋ねに来ていた。自分の上司、エイリスの母校に。

「エイリス、多分着いたけどちょっと自信ないわ」

ケイトの疑問も無理はない、なぜなら大学のはずの目の前の建物は、見かけだけなら完全に中世ヨーロッパのお城なのである。世の中にはそんな大学がない訳ではないがケイトは全然知らなかった。

「そこが渡した地図の指し示す通りの場所なら間違いなくそこだ」
電波で通じたケータイの向こう側、エイリスの答の通りケイトの目の前の城（らしき建物）は間違いなくノキ大学であった。ケイトは大学前の看板を見てようやく核心を持った。

「確か物理学だったわね」

そう呟きケイトは肩にかけていた鞆から見た目は玩具のスパイグッズの、本物スパイ道具を取り出した。つまりはピッキングや窓開けの為の道具である。

「ごめん、駄目だったよ」

ファイのその呟きの通り、由希達は結局アイスのコンピュータへのハッキング行為は諦めた。

「直接って方法は始めからないわよ。私達の物理セキュリティはあなた達一般人の非じゃないんだから」

尋ねる前に答えられてしまった由希は開きかけた口を開かなかった。
「ホットの方のコンピュータに侵入する事なら出来るんじゃない？」

「いや、ホットのコンピュータの電子セキュリティはアイスより遥かに優れてるし僕らが抜けた時点で…」

言葉を途中で止め由希の方に顔を向けて、マネキンのように固まるファイ。

「私も今ので思いついたわ」
しばらくの沈黙を破るサリーの声。

「由希、やっぱり君を仲間にしたのは正解だったよ。君ほんと役に立つね」

「あ、ありがとう」

意味不明なまま、とりあえずそう返しておく由希。

ケイトがノキ大学の正門をくぐる事はなかった。塀をよじ登り、跳び移った2階の窓から、まるで泥棒のように鮮やかに大学内に忍び込んだケイトは、人をうまく避けながら進み、誰もいず静かな、とある部屋へと入って行った。

そして数分後、大学を出て来たケイトの鞆にはとある論文と資料とデータが入っていた。

「いやいや、そんな作戦うまくいくの？」

ファイとサリーの考えを聞いてすぐさま尋ねる由希。

「もちろんよ」

「というかもううまくいったぜ。無事アイスのメンバーの1人、コードネーム、ブラウンを裏切らせて、僕らの仲間にしたよ。見なよ、彼からさっそくメールだ」

（君の言う通りだなファイ、アイスはつまらないよ、今は君に協力してあげる）

いや、早すぎだろ、さすがに。由希は口にこそ出さなかったが、心の中で盛大に突っ込んでおいた。

ケイトが大学を去ってさらに数十分後、彼女が訪れ、資料やデータを盗んで行った部屋に翔は来ていた。

翔はケイトもエイリスですら知らないその部屋の隠し扉を開き、その先の小さな隠し部屋へと入って行った。真っ白で本棚が一つ置かれているだけの部屋。そこで翔はまるで落ち込んでいるかのように座り込んだ。

「ブラウンからの情報でハッキングの難易度がいちじるしく下がったよ」

後悔している所もあるのか、少しだけつまらなさそうに言うファイ。「由希、これが君とその靴に関する、安易文章化したアイスのデー

タね」

そう言つてパソコンの画面を由希とサリーに見せるファイ。

（由希は宇宙の神に選ばれし者、靴は彼だけが使える世界征服兵器）
そんな訳でアイスの所持するデータから、由希達がわかつた事はアイスが何か、由希と靴について壮大に勘違いしているであろう事くらいだった。

ファースト - 8、理論インフレーション

今一般的に考えられている、とても小さく、高温高密度だった初期状態の宇宙。そこから膨張を続けるこの宇宙の形はボール型のように描かれる事が多い。しかし宇宙の形はケーキの一切れであると私が提唱し、先日行った分裂物質的な宇宙観測は示している。

私はコンピューターのシミュレーションで、この形の宇宙モデルの膨張初期の状態を予測して見ると、それはまた驚くべき結果であった。

何が原因かはもう今となっては正確にわかる訳もない、もしかしたら単にそうゆう物だからと言えいいのかも知れない。その宇宙は存在しえない物であった。最大の問題はこの予測結果以外の全ての物事が分裂物質的宇宙観測の正しさを証明してしまっているという事である。そして現実はこの宇宙は存在している為、確かにそのなかったはずの宇宙は存在したという事になる。

私は完璧に納得のいく解を求め、それは意外にもすぐに見つかった。数学的に表現されたケーキ型初期状態宇宙では、最も右端の空間の角度を少し曲げてしまえば、この宇宙の成長は可能になる事に気付いたのである。もしそ

「意味わかんないのは俺だけかい？俺ってけっこうバカだったのかい？」

印刷ミスか意図的な物が、途中で途切れているカール・ウェラーの論文を一通り読み終えた後のリヴァースの呟き。

「大丈夫だろう、私も全然意味わからん」

「いや、それはちよつとおかしいでしょ、まあ私もほとんど意味不明なんだけど」

エイリスの言葉にすかさず反応するケイト。

「で、これを書いたお前の友人のウェラーって奴は頭大丈夫な奴だ

ったのか？」

「とりあえず健康診断では異常はなかったな。ただ確かにかなりの変わり者ではあったよ」

リヴァースの偉そうな問いに特に怒ったりもせず冷静に答えるエイリス。

「あなたはこの論文の初期宇宙の空間の右端の角度つていうのが、宇宙の角度と同じ類いの物だと考えている訳？」

「それをこれからお前達と話し合おうと思ってる訳だが、私個人、今の気持ちとしてはそう考えているな」

そう答え、それからエイリスはミーザのモニター画面にケイトがノキ大学から取ってきたカール・ウェラーの研究データを表示させた。

「へえ」

パソコンで由希と靴のアイスのデータをより深く調べていたファイの唐突な声。

「何かあったの？」と由希。

「ああ、由希、言っているのか悪いのかわかんないけど、言いたいから言うよ、君、実は養子らしいぜ」

ファイの言葉にサリーはそれがどうしたという感じで、由希も一瞬驚きこそしたが特に気にしたりする事もなかった。

「まあなんとなくわかってはいたよ、教えてくれなかったのは悲し「よかったじゃん」

「そうだ、よかったじゃない」

由希の声を遮るファイの声に続いてサリーも急に元気に立ち上がりそう言った。

「何が？」

2人が何が言いたいのか気付きはしたが一応聞いてやる由希。

「これで愛しの姉さんにアタックしても別に不道德にはならないぜ」
まったく予想通りのファイの言葉に由希はまた深いため息をついた。

「論文とほとんど同じね」

むしろ論文よりも早く文章が途切れている感じで、カールの宇宙の理論について、それはさらに意味不明だった。

「他の研究のデータもある、もしかしたらそこにも何か手掛かりがあるかも知れん」

そして次々と画面を切り替えカールの研究記録を順番に表示させるエイリス。

ネス湖の古代遺跡、ホバーボード、人工的ジン、限りなく完璧に人間なアンドロイド、はくこうめいさい白光迷彩

「ちよつと止めて」

突然のケイトの叫びにエイリスもリヴァースも少したじろぐ。

白光迷彩、見られたくない物を発光させ隠す技術。

ケイトはただ黙り、目を見開き、必死に7歳のクリスマスの時の出会いを思い出そうとした。

そんな事ってある？あのサンタはカール・ウェラー？

ケイトが自分のその疑問を呆然とするエイリスとリヴァースに言う事はなかった。なぜか言ってはいけないような、そんな気がしていた。

「その灰色の靴、どこかの工場とかじゃなくて、カール・ウェラーが個人的に作った靴らしい、へえ、これは面白そうな話になってきたね」

言いながら灰色靴に関するアイスのデータの詳細な文章化を終えるファイ。

10年ほど前、カール・ウェラーが靴を作ったのは記録に残っている限り灰色靴のみで、彼はそれを作るとすぐ日本に渡り、靴屋を作り、それを完全に自分から独立させてから一般的には姿をくらました。今では彼は完全な行方不明で死亡の噂も後を絶たない。

「カール・ウェラーって誰？」と由希。

「まあ知らないのも無理ないわよね。ウェラーは私達みたいな人達にはとても有名な天文学者よ、世間的にはほとんど評価されてなかったみたいけどね、まあ当然だろうけど。確かに私達の中でも彼の宇宙の研究自体には興味ない人が多いわ。彼の魅力はその機械技師としての技量だった」

「早い話、彼はかなり高性能なアンドロイドをたくさん作ってたって訳さ。アンドロイドはわかるでしょ由希、人間ばい機械ね」

サリーとファイの説明は由希にとってはどこまでも興味深かった。

「なんか何が起こってるのか、本当に知りたくなってきたよ」
呟く由希。

凄じ技術を持っていた行方不明の天文学者の残したたったひとつの靴と靴屋。なぜか知るはずのないミーザのセキュリティコードを知っていた自分。そして自分が灰色靴にここまで惹かれる訳。

それからまた数分後、由希達3人は前のケイトと同じようにノキ大学に忍び込み、翔が訪れたのと同じ隠し部屋を尋ねた。

「最近誰かが来た形跡があるね。とりあえず指紋でもとって誰か調べとくよ」

言いながら部屋を調べ回るファイ。

「駄目ね、カール・ウェラーの研究データは全部その誰かが持ち去ったようよ」

サリーが最後にそう言った後、すぐに人が来たので3人は慌てて大学から立ち去った。

ファースト - 8、理論インフレーション（後書き）

プロット的には今で半分くらいだけど、どうだろうか。

ファースト - 9、奇跡は起こす物

「とりあえず後数十分もしたら誰がデータを持っていったのかわか
ると思う」

そう言つてパソコンを操作する手を止めるファイ。パソコンの画面
には様々な人のデータが目も眩むようなスピードで切り替わってい
た。

「それにしても少し妙ね」とサリー。

「何が？」

全然まったく何が妙なのかわからない由希。

「僕もそれは思った。侵入した形跡だろ？」

「形跡？」

「ほら、窓の鍵、壊されてたろ、誰かに」

ファイの言葉にすぐに納得する由希。確かに由希達が侵入した時、
すでに窓の鍵がひとつ壊れていて、おかげで由希達はそこから簡単
に侵入出来たのである。

「あれあんた達があらかじめやってたとかじゃなかったのか？」

「冗談だろ、さすがの僕らも見えないくらい遠くから鍵を壊すなん
て、魔法使いみたいな芸当は出来ないよ」

むしろ出来ないのか、と心の中では思いつつも「確かにそっか。」
と納得しておく由希。

「ノキ大学は見かけ以上にいろいろしつかりしてる学校だよ、窓の
鍵が壊れてるなんて1日もあれば誰かが気付いて修理屋が呼ばれる
はず、つまり誰か、僕らの来るよりも前の1日以内くらいに、あの
大学に侵入した人がいるって訳だね、しかもそいつはほぼ確実にデ
ータを持ち去った人とは別人さ」

「なんでほぼ確実に別人なの？」

「すぐさま質問を発する由希。」

「あの隠し部屋を知っているような人ならノキ大学に普通に入れる

はず、私達だって追われる身だから姿を見せられなかったただけなのよ」

サリーの言葉を最後に黙り込み考える3人。その沈黙はすぐに途切れる事となる。

「そういえばミーザの今の1つ前の管理人のチョーカーはノキ大学出身じゃなかったっけ？」

「さあ、でも試して見る価値はあるわね」

ファイにそう返し、由希の方を向くサリー。

「何？」と由希。

「ミーザにもう1回ハッキングしようと思うんだけど、少し前ので絶対セキュリティコードは変わってるはずなんだよ」

「またわかるなんて奇跡と思うけど」

由希はそう返したがその奇跡は起こる事となる。

「まあ、物は試しだぜ、奇跡ってのは起こす物さ」

数分後、由希がまたセキュリティコードを全てわかったおかげで、ミーザへのファイの2度目のハッキングは成功した。

「やっぱりそうだが、データを持っていたのは多分ミーザの現管理人のケイト・リースだ」

ミーザの履歴にカール・ウェラーの論文を見つけたファイはすぐそう核心した。

「まあチョーカーがノキ大学出身なら大学に侵入する必要はないでしょうしね」

サリーの言葉に頷くファイ。

「でもそのケイトって人はどうして？」尋ねる由希。

「今は僕らにもわからないね、ああ、今度はこっちの結果が来みたいだ、とりあえず誰がカールのデータを持っていたのかわか」

「誰だったの？」

言葉を止めたファイに先にそう尋ねたのは由希だった。

「これはいいよ核心に迫ってきたかもね」

そう言って由希達に振り返り、ニヤリとするファイ。

「由希、あのアイスカ、ホットのメンバーか、カールと近しい友人、知人しか知らないはずの隠し部屋からデータを持ってつたのは君の友達、木嶋翔らしいぜ」

ファイの言葉にまた、さらに頭を混乱させられる由希。

「あいつは、そのカール・ウェラーとかいう人の知り合いって事？」

「あの隠し場所の存在を知ってたって事はかなり信頼されてはいたはずだぜ。まあもしかしたら彼がホットか、もしくはアイスのメンバー、もしくはメンバーだったっていう可能性もある訳だけどね」

「まあそれはすぐにわかるわ。」

それだけ言ったサリーはすぐに、ファイの操作していたのとは別のパソコンの起動スイッチを押した。

「また侵入されただけで何もなかったわ」

「ミーザにハッキングなんて信じられないな」とリヴァース。

「ケイト、お前の仕業ではないだろうな」

その疑問はごもつともすぎてケイトはエイリスに怒れなかった。1回目とはかく、2回目は新しいセキュリティコードを知っていたのは、普通に考えて書き換えた張本人、ケイトだけである。

「私にメリットがないわ」

ケイトのその反論も、まさにごもつともでエイリスの方も黙り込んだ。

エイリスもリヴァースもまったくミーザがハッキングなど訳がわからなかったが、実をいうとケイトはある1つの可能性に辿り着いていた。

「私、ちよつと留守にするけどいいわよね」

「別にいいが、どこに行くんだ？」

「1つちよつとだけ心当たりがあるの」

そう言い残し部屋を立ち去るケイト。

「あいつ、マジでかなり怪しくないかい？」

リヴァースの呟きにエイリスは何も言えなかった。

「木嶋翔、どうやら彼はホットとも、アイスとも特に関わりはな
いわ」

「それどころかさらに驚愕の事態だぜ、なんと彼、今行方不明だよ」
由希はもう何があっても驚かないと思っていたが、翔の事にはさす
がに目を大きく見開き、呆然とした。と、その時凄まじい突風が吹
き荒れているような轟音が鳴り響き、ミゾノ自体もかなり揺れた。

「そういえば何か忘れてるような気がしてたんだよ」とファイ。

「ミーザにハッキングしたら場所がばれるって事？つまりこの音は
ホットの刺客の音？だとしたら四方八方、ていうか囲まれてるんじ
やない？」

まさに由希のその推測通りで、由希達はミーザにハッキングした事
で場所がばれ、突風のような音はホットの宇宙戦の音で、ミゾノは
いくつかのそれに囲まれていた。

ファースト - 10、宇宙地震

「逃げられると思う？」

沈黙が答だった。確かにこの状況で逃げるなど無理だろう、無理なはずなのに、

「少しだけミゾノを操作させて」

由希の意外な言葉にファイとサリーは驚き顔を見合わせた。

「操作方法はわかるのかい？」

「大丈夫、今は信じて」

この際、明らかに雰囲気のおかしい由希をファイもサリーも信じる事に決めた。由希はついさっきまでサリーがいた、ミゾノの操縦機の前に立ち、ゴクリと息を呑んだ。

「こいつらは「わかってる、大丈夫」

ファイを遮る由希は確かにわかっていた。ミゾノを取り囲んでいるホットの宇宙船が放とうとしているのは、配置や数、音、今わかっているホットの技術力から考えておそらくハイドロネット、要するに馬鹿でかいスライムである。

でもなぜ自分はファイを遮った？確実にそうだとわかった？こんなに少ない情報で？それらの疑問はそれぞれ一瞬で自己解決した。何もかも思い出す、そういえばそうだ、俺はそうだった。

「とにかく逃げるよ」

由希が言うのとホットの宇宙船群がハイドロネットを放つのはほぼ同時だった。ハイドロネットは放つと必ず少し後ずさる、由希はその囲んでいる宇宙船同士に出来る一瞬の隙間を狙っていた。

そして次の瞬間、由希のその企みはうまくいった。ミゾノはうまく宇宙船の隙間をぬい、ホットの宇宙船群に囲まれた空間を抜け出した。

アメリカ、カリフォルニア州のとある一軒家をケイトは尋ねてい

た。

「ケ、ケイト、あなたどこにいたの？全然連絡つかなくて、巷の噂じゃあなたもう死んでたのよ」

ケイトの高校の頃の友人、キャンベラ・クライトンの再会してからの第一声はそんな感じだった。

ケイトは懐かしさやらおかしさやら様々な感情を抱き、とりあえず苦笑した。

「まあいろいろあってね、それと残念ながら今日は思い出話をしに来た訳じゃないの、あなたにちよつと頼みがあつて」

「何かあつたの？」

急に真剣な顔付きになるキャンベラ、それはそうだ、彼女は医者なのだ。自分に用という事は、かなり深刻な事態だつて充分考えられるのだ。

「かなり信じられないような話するわよ」

ケイトはそれからミーザの事や今の事態を簡単に説明して、自分の体に関する調べ事をキャンベラに頼んだ。

由希が運転するミゾノはあつという間にホットの宇宙船群を完璧に振り切り、再び太陽系のどこかをさまよつていた。

「由希、完全に確信したぜ、君普通じゃないね」

ファイの言葉に頷く由希。

「俺もそうかも知れないけど、本当に不思議なのはこの靴だと思う」それから由希は灰色靴を両方とも脱ぎ、ファイとサリー、そして自分の中心にそれらを置いた。

「何かこの靴が何か、自分の何かを」思い出させる、それが必要な時に」

自分を遮ったファイの言葉にまた頷く由希。

「何か心当たりがあるのファイ？」尋ねるサリー。

「まだたし」

嵐の中のような凄まじい揺れにファイの言葉は止められた。

「何なの？」と由希。

「わからない」

「わからないわ」

ファイとサリーの言葉は同時だった。

「地震じゃないんだよね？」

「宇宙空間のただ中でそんな事ある訳ないだろ、揺れるべき地面がないんだぜ」

由希の問いに叫び声で答えるファイ。

「どうだった？」

キャンベラの働く病院の一室、かなり興奮気味にケイトは調べ事の結果を尋ねた。

「ケイト、少なくとも私が可能な診断方法で調べた限りでは、あなたの体の中に別に変わった物は埋め込まれていなかったわ」

「そっか」

がっかりしながらも、少しほっとするケイト。ケイトは自分の体に何者か、おそらくカール・ウェラーか、彼と関わりのある人物が、おそらくミーザの情報を得る為に、特殊な情報伝達機のような物を埋め込んだ可能性を考えていたのである。

ミーザの管理人となった者は世間的にほぼ姿を消し、極力外との関わりを絶ってしまう為、このような計画を実行するには将来ミーザの管理人となる人物を予測し、その人物にかなり早い段階で伝達機を埋め込むしかないが、その点ケイトは、優秀だったらしいミーザの設立者チームのリーダー、ジャック・リースのひ孫であり、まさに計画に最適な人物だという訳である。さらにその事実を知る数少ない人物の一人であるエイリスとカール・ウェラーが大学時代の同級生だというのも疑惑を加速させていた。

揺れはどんどんひどくなり、もう由希もファイもサリーも立ってられなくなった。

「やばい、これ以上はやばい」

いつもからは想像も出来ないほど凄まじく慌てふためくファイに、由希は呆然とした。

「由希、私達もう死ぬかも知れないわ、このままこのペースで揺れが大きくなっていくとミゾノは後数分で解体よ」

ファイに比べるとずいぶん落ち着いてはいるが、やはり焦りを隠せない様子のサリーの言葉に由希も顔を青ざめた。

「な、何も思い浮かばない、俺には何も出来ないよ」

もはやファイには聞こえていないであろう、由希のその言葉にサリも完全に真っ青となった。

とその時、急に揺れは止まり、3人は何もショックになるような事があつた訳でもないのに、同時に気を失い、その場に倒れた。

キャンベラと別れたケイトはミーザの所に戻る為の道を車で走っていた。途中、ケータイに突然かかってきた知らない電話番号に対応する為、彼女は車をその場に止めた。

「もしもし」

「ケイト・リース、ミーザの管理人だな？」

「あなたは？」

知らない何者かの意外な言葉に驚くケイト。

「俺は木嶋翔、カール・ウェラーの助手をしていた事がある日本人だよ。ケイト、とりあえずケータイじゃなんだし直接会って話さないか？」

「いいわ、今あなたはどこにいるの？」

ケイトは迷う事なくそう返した。

ファースト - 11、ピエロ達

木嶋翔がカール・ウェラーと出会ったのは彼がノキ大学を去って行方をくらましてから28年後、つまり今から4年前だった。

当時少し引きこもり気味だった翔の前に突然現れたカールは、ミーザや自分の研究の事など様々な知識を教えるだけ教え、そして時たま彼に研究や開発を手伝ってもらう生活を、2年間続けた後、彼は翔の前からも姿をくらましてしまう。

「翔、お前がもうすぐ通う事になる高校で、お前は一緒にいて楽しい、本当に友達らしい友達が出来る。その友達は高校卒業の時期に姿をくらますかも知れないが、それはその友達にとってもお前にとっても、そして世界にとっても間違っている。だから絶対にそいつを見失うな。それともし彼がいなくなつら、ミーザが何かあるかも知れない、手掛かりもそこから見つかるかも知れない。」

そんな風な言葉を残したカール。結果的には友達が出来るまでは当たっていたし、その友達が姿をくらますのも当たっていたが、その時期はズいぶん外れていた。高校に通い始めて1年半、まだ2年生卒業の時期と言うにはあまりに早い頃に由希は姿をくらましてしまったのだ。

翔は由希を探していた、少しばかり外れたカールの予言をまだ信じていた。

「ん？」

真つ暗な部屋で由希は目覚めた。

「ファイ。サリー」

大声で仲間2人を読んでみるが返事はなかった。

「ファイ、サリー」

「あの2人ならここにはいない」

知らないその声に振り向く由希。

「あんたは？」

いつの間にか明かりがついていて、ドアも窓もない部屋の中で、自分と同じく立つ青年に由希は尋ねた。

「サリー、サリー」

ファイの呼びかけの声で目を覚ますサリー。

「ファイ、ここは？」

目をこすりながらも尋ねるサリー。

「さあね、最初は牢屋か何かだと思ったんだけど、それにしても快適過ぎるよね。」

ファイの言葉に、自分達のいる高級ホテルの一室のような部屋を、見渡してから頷くサリー。

「私達、何かに捕まったの？」

「おそろくね」

サリーの問いに、立ち上がり、頭を軽く抑えながら答えるファイ。

「そつえば由希は？」

「僕の目が覚めた時にはすでにいなかったよ」

今度は少し戸惑ってから答えるファイ。

「ファイ」

しばらくの沈黙を破るサリーの唐突な声。

「由希は大丈夫だと思ってるの？」

ファイはまた少し戸惑ってから質問に答えた。

「おそろくね」

「あなたの由希に関する考えを全て聞かせて」

また少しの沈黙を破るサリー

「あなたがカール・ウェラーの助手？」

ノキ大学の近くの公園のベンチに座っていた翔に声をかけるケイト。

「ああ、初めましてですね、ケイト・リース」

立ち上がり、ネイティブと変わらないくらい綺麗な英語で挨拶する

翔。

「で、なぜ私の事を知ってるの？私に何か用なの？」

探るように尋ねるケイト。

「まずあなたの事は知ってる、ケイト・リース、ミーザを作ったチームのリーダーだったジャック・リースの娘で、ミーザの現管理人」
「まあそうね」

警戒はまったく解かずに頷くケイト。

「それとあなたに用がある、ケイト、ミーザには今何かが起こってるんじゃないのですか？」

今度は声は出さずにただ首を縦に振り、頷くケイト。

「話すわ、私の考えも含めて」

それからごく最近ミーザに次々起こった奇妙な事態を、ケイトは一通り説明した。

「私は、バカな考えかも知れないけど、おそらく何か凄く、人類よりかなり進んだ文明の生物の仕業だと思う。あのミーザに入ってた文章はおそらく偶然や失敗ではなく、生物がミーザに入れたんだと思う、何が目的かはわからないけど。2度目、3度目のハッキングは、ただまったく関係ない人がただ悪ふざけしてるだけ」

「本当に驚いたよ」

まさに言葉の通り、本当に心の底から驚いた様子の翔。

「カールが選ぶ訳だ」

「選ぶ？」

「ああ、あなたの考え通り、カールはあなたが、ミーザの管理人になる事を見越してあなたの脳に昔、特殊な機械を仕掛けたって言ってた。ミーザの情報を得る為に」

「ちよつと待って、私、医者を知り合いに検査してもらったのよ」

翔の話を止めるケイトの問い。

「ケイト、もうわかってるだろう、世界はあなたが思っていたより、ううん、もしかしたらカールが思っていたより進んでいるのかも知れない。それと悪いんだけど、俺はあなたに仕掛けられた機械の事

とか、それから、というかあなたから入手したミーザの情報とかの事は全然知らない。でも」

「悪ふざけの犯人がカール・ウェラーの関係者ってのは間違いなさそうな訳ね」

ケイトの続けた言葉に頷く翔。

「それに生物の仕業、全て合点がいったよ。ケイト、ついて来て、あなたが見れなかった、カールの宇宙角度の論文の全てを見せるよ」もうケイトの翔への疑心はいつの間にかほとんど消えていた。それどころか彼女は翔に一種の仲間意識を抱いてた。同じ不安と興味を抱える者、お互い何か、自分達の知らない何かの、手の平の上で踊らされているだけのピエロなのかも知れないという不安。今世界に何が起きようとしているのか、カール・ウェラーという人物が何を知ったのか、知ってしまったのか、それを自分達も知りたいという興味。

「そんな話」

「信じられないかい？ だけどそれなら全部説明がつく。このタイミングで思いだしたって事は僕もピエロかな、昔見たカールの論文、あのふざけた論文は全部真実だったんだ。そして167度、いや正確には166度の宇宙でたった一人生き残れる人間、のような生物、それが由希で、あの灰色靴は彼の脳に作用して必要なタイミングで、必要な記憶を彼に思い出されるマシンなんだ」

ファイは言いながらも、心のどこかでは自分の考えをどうしても肯定出来なかった。

違う、何かが間違っている、何が間違っている？ 本当に間違っているのか？ それは僕らに理解出来る事なのか？ 違う、何もかもが…、

今存在するどんな物よりも小さかった初期状態の宇宙、そこに最初の生命（ゼロとでも名付けよう）、それはたしかに存在していた。ゼロは神じゃない、しかし今、いや、これまで誕生した生命体の中で最も進化した究極の生物こそが、そのゼロだったという事は間違いないように思う。人の細胞より小さな宇宙で生きられるほど小さな生物が、ビッグバンを起こし、インフレーションを起こして、この宇宙を作ったのである。もしゼロが人類の中の誰かならそれが出来たであろうか？もしそれがイルカなら？プログラムに潜む電子生命なら？答は全て否であろう。だからこそゼロは優れていると言えるのだ。ゼロが宇宙の安定状態を保つ為にその端の空間の角度をほんの少し曲げた時、今の宇宙、つまり165°の宇宙は誕生した訳である。

「やっぱり意味わかんないわ、だけど今のこの宇宙が165°ってのはわかる」

「それで十分さ、でこれがカールの、俺もノキ大学で見つけるまで見た事なかったんだけど個人的に残してたメモ」

少し苦笑いしながらもカール・ウェラーの論文を片付け、メモをケイトに手渡す翔。

167°の宇宙なら人類は生きられない。
角度を変更する装置は火星。

製作者は不明。ゼロじゃない。それは太陽系の外からきている。

「だけ？」と顔をあげるケイト。

「まあね」

肩をすくめる翔。

「これからどうするのファイ？」

重苦しい雰囲気の中、尋ねるサリー。

「まずはここからの脱出さ」

言いながらも口から小さな丸い機械を吐き出すファイ。

「その後は？」

サリーのその質問にファイは少しの間硬直した。

「今話さないといけないかい？」

答をそんな問いで返すファイの顔は、これまでサリーが見てきた中で一番怖い物だった。

由希はミゾノに乗り込み、ファイやサリーがまだ捕まっている巨大な宇宙船を離れ、火星へと出発した。

うまくいくかどうか、大丈夫、出来るさ、やるんだ。

「急ごう、サリー」

「ええ」

凄まじい轟音を鳴らしながら、ファイ達のいる部屋へと、宇宙船のどこかを壊した隙間から入りこんできた、ミゾノよりは少し小さいが高性能なマシン、アニリに、ファイとサリーはすぐ乗り込んだ。

「由希、だと思う、ミゾノでどこかに向かつてる。ていうかこのコースはやっぱり火星だ」

言いながらもすぐにミゾノの後をアニリに追いかけさせるファイ。

「由希」

ただ呟くサリー。

数十分後、火星に地味にそびえ立つ、地球の普通の一軒家の倍くらいの大きさの施設の前に由希はミゾノを着陸させた。

家の周りには、人工的に発生させられた、人が生きる事の出来る環境があった。

「これは小さい、見つかってない訳だね」

ミゾノを出た由希が空を見上げれば、確実に見えるくらいの距離に待機したアニリの中で、下を見ながら言うファイ。

「火星に興味ある人がほとんどいないってのも拍車をかけてるんでしょうね」とサリー。

「それじゃ僕らも行こう、もし僕の考え通りならこのまま見てるだけじゃ大変だ」

それからファイはアニリをすぐに着陸させた。

施設の中は巨大な部屋に巨大なマシンがあるだけだった。

「由希」

ファイの声にマシンをいじる手を止め、振り向く由希。

「ファイ、サリー」

ずいぶん驚いた様子の由希。

「由希、なんでこんな所にいる？そのマシンが何か知ってるのかい？」

「ああ」

ファイの質問に呟くように答える由希。

「ゆ」「ファイ、サリー」

サリーを遮る由希。

「さよなら」

「ゆ」

「由希、止め」

サリーとファイが静止する間もなく由希は2人に、ミゾノから取ったのだろう、それに積んでいた電磁^{レールガン}投射銃を放った。

そして倒れたのは由希だった。

ファースト - 13、真の計画

167°の宇宙でも166°の宇宙でも人類は生きられない、ただし167°の方ならゼロは生きられる、プランクトンもおそらく大丈夫だろう。

もし今現在165°のこの宇宙が167°になったとしたら人類は全て死に絶えるだろう。ただしその死とは多くの者が考えるそれとは大きく異なる。

まず宇宙角度が突然変わった場合、宇宙は一旦非常に高温となり、その時すでに生き絶えているであろう人類の遺体は、全て燃え尽き、元素となったそれらは宇宙に散らばり、宇宙のどこかで小さな星となる。

天国や地獄はもちろん、魂などという物は存在しない。ただ生物は死ぬと星となる。

カル・ウェラーは星となりたかった。宇宙を167°にしたかった。なぜかはわからない。

ファイはそう考えた。結果的には間違っていたのだが。

「由希」

命が危機にさらされた時強制発動される反射シールドを解除して由希に駆け寄るファイ。

「ファイ、ゆ、由希は？」

「死んでない」

目を閉じ倒れた由希を抱えたまま言うファイ。

「これは、ん」

急に起き上がった由希に首を捕まれるファイ。

「ファイ、由希、何して」

一旦ファイを弾き飛ばし、素早く立った由希にみぞを一発入れられ意識を失うサリィ。

「そうか、君は」

アンドロイド……。心の中でそう言った直後、ファイも由希に意識を飛ばされた。

「正解、ファイ」

言ったのは由希ではなかった。立ったままピタリとして動かない由希が、いつの間にか脱いでいた靴が今度こそ喋っていた。

カールに計画を与えたのは私、つまりゼロの腐食した一部分からかろうじて生み出された、偶然にも人が履く、靴という物にそっくりだった私。

人類はどの道もうすぐ滅ぶ運命だった。宇宙の角度はその寿命にも関係していた、なら全てが滅ぶくらいなら助かる命は助けて欲しいという気持ち。

カール・ウェラーはそれを理解してくれる人間だった。ホットかアイスの人間ならおそらくそうはいかなかった。彼らは宗教意識が強いからそれが怖くもあった。厄介なのはカールよりもホットやアイスの方が優れた技術を持っていた事だった。

カールのしようとしている事が彼らに感づかれた場合、それはあっさり阻止されるだろう。だからこうしてこの靴によく似た姿と、カールの最高傑作だった成長するアンドロイドを使い、こうして月面の角度を変えるマシンを誰にも邪魔される事なく操作する状況を作る計画を立て実行したという訳だ。

ケイトのような存在を見つけるのを初め、いろいろな事が当初考えていたより手間取ってしまったが、結果的には全てがうまくいった。

と、カールは思っているかも知れないが少なくとも彼の考えていた通りにはいかない。

なぜならこのマシンは角度を変える物でも何でもない、というより宇宙の角度やゼロの話など全てデタラメなのだ。

簡単な話。

ある生物Aが地球という星を手に入れる為、人類という種を滅ぼし

たかった。

そして一掃するマシンを造った、それがこのマシン、人類が言う所の爆弾である。ところがそれはあまりに強力すぎる物だった。

少しの可能性の危険も回避するのがAのやり方である。いつ暴発するかもわからないそれに近づく事が出来なくなった。

そして地球にいた、Aが作った、地球の様子を探る為の人工生物コズクラ、つまり私に白羽の矢が立った訳である。私は死を恐れないよう、生まれる時にプログラムされていたのでうってつけだった。

靴型生物はいつの間にか生えていた、小さな蜘蛛のような足をうまく動かし、マシンの操作台へとやってきた。

「カール？」

「カール・ウェラー？」

仲良く頭を抱えていた翔とケイトの前に、なんともまた唐突に彼は現れた。

「久しぶりだな、翔。そしてケイト、普通に嘘ついてごめんなさい」
軽く苦笑気味のカール。

後はこれを爆発させればいいだけ、長い仕事ではあったが、楽な仕事でもあった。

たがその爆弾が爆発する事はなかった。正確にはコズクラが爆発させる事がなかった。

「お前、由希じゃないな？」

「いや、俺が由希だよ、正確には由希のモデル。もっとはっきり言う、君の知ってるアンドロイドとは違う由希さ」

コズクラの問いに笑みで答えるコズクラを手で持つ、さっきまで外で立っていた由希。ファイヤサリーと数日を過ごした由希とは違う由希。カールの知り合いの由希。

「成長するアンドロイドね、笑わせるよ、そんな物なかったって訳か？」

「正解」

「カールはこれが爆弾だって気付いていたのか？」

「いや」

コズクラの質問にひとつひとつ律儀に答える由希。

「カールのあの意味不明な理論、利用させてもらったつもりだったのだけど、あれは私を騙す為なのか？」

「いや、真剣だよ、それは間違いないよあの人、ただあんたらのミスは自分達が、人に負けてる部分なんてひとつもないと考えた事さ」

「想像力？」

「人類が手に入れた最高の力さ、人は心すら全て満たせる想像が出来る、だからこそ人はそこまで発展に興味を持たないのさ。奴らは多分こう考えていたんだ、文明の遅れた俺達が自分達の真の計画に気付ける訳がない。なぜなら人類は彼らよりもおそろくずっと発展が遅かったのだから」

説明するカールは実に楽しそうだった。

最初の数年、確かにカールはコズクラの話を信じていた。しかしだんだんと想像は膨らんだ。騙されているとしてどうすればいいのか？おそらくそれならコズクラを操る真の敵がいるはず、それをどうかしなければおそらく意味がないだろう。

「答は簡単さ」

足をバタバタさせあがくコズクラを持ったまま由希はミゾノにマシンを入れ、オートパイロットを作動させた。

「お前ともさよならだ」

そう言つてコズクラを機内に残し由希はミゾノを出てきた。それからミゾノは打ち上がり宇宙のどこかへと消え去った。

「つまり靴の反応をチェックした敵が、なぜ戻ったのかを聞く為に、靴を回収しようと爆弾の入った、ホットかアイスの乗り物を回

収する」

「ホットかアイスの乗り物は全て止まった時の揺れが凄いから、それで爆弾ドカンって訳ですか」

カールに続いて言う翔に頷くカール。

結果的にそれがうまくいったのかどうかは誰にもわからない。ただコズクラを生み出した宇宙生物が太陽系に姿を見せる事は2度となかった。

ファースト - エピローグ、残る問題

「うまくいったんだね」

低出力の電磁投射銃で倒れたふりをした由希に駆け寄った時、簡潔に話を合わせてくれと頼まれ、その通りにした、気絶していたふりのファイ。

「うん、俺を信用してくれてありがとうファイ。それとサリーの事はごめん」

2つの意味で頭を下げる由希。

「まあ、しょうがないさ、ところで君、何か武術でもやってるのかい？」

サリーを背中に抱えながら尋ねるファイ。

「一応ね」

少し恥ずかしそうに答える由希。

「はっはっは、そうだった、それはあれだよ、あれ」

「違うさ、宇宙の角じゃない、定規の」

「おいカー」

カールが全ての事情を説明した後、なぜか、でもないだろうがケイト達はエイリスやリヴァースも呼んで、宴会していた。そしてカールとエイリスのおやじ2人はあつという間に飲みつぶれた。

「つまんねえ、俺は帰るぞ」と立ち上がるリヴァース。

「リヴァース」

ケイトの声にピタリと止まるリヴァース。

「バイバイ」

実は2人共、互いに初めて言った互いへのちゃんとした挨拶だった。

「ひとつまだ決着のついていない事があるわ」
「な、何？」

なかなか迫力あるサリーに少し縮み上がる由希。

「そついえばそつだよ、由希、お姉さんとうまくやれよ、心から応援してるぜ」

「は？」

由希にはまったく意味がわからなかった。あのアンドロイド何しでかしたんだ？

ファースト ・ エピローグ、残る問題（後書き）

とりあえず最後に自分でツッコんでおこう。
どこが戦争？

ブローグ1、展開予測男

時代が生んだ、ある意味天才、カール・ウエラー。

彼は運命のような始まりに導かれ、嘘（彼にとってはなかなか本当）の宇宙角度理論をうまく広め、自分の功績である仲間やアンドロイドをうまく使い、世界の裏に潜む闇の存在、地球の全ての電気をコントロールするコンピュータ、くだらない対立を続ける2つの秘密組織、それら全て利用しついに太陽系崩壊を目論む（厳密には違うけど）謎の宇宙人達が送り込んで来た靴型生物から地球を守る事に成功した。

と、ここまでが、もうほとんど1年前の話であるこれだけの意味不明な物語がまだ全て、全ての物語の序文にすぎない事を予測していた者がいただろうか？

実は1人だけいたのである。それが普通の高校生に戻った藤原由希と木嶋翔の学校には通っていないけど近所に暮らしている、見かけは何処にでもいそうな、でも名前は相当珍しいだろう由希達と同じ歳の少年、白峰^{しろみね}シロ。

ブローグ1、展開予測男（後書き）

まだまだ靴物語、続ける事にしました。

セカンド - プロローグ2、科学解読女

どういう事？

そばかすが目立つ化粧気のまったくない顔、硬そうな真つ黒な髪、小学生の頃、いも娘といじめられていた、そんな受験を控えた15歳の中学生少女、秋本久住^{アキモト クスミ}は自分の出した答を1年間信じられずにいた。

頭の構造が特殊だと思われる人は世の中たくさんいるが彼女ほどのレベルはそうはいない。

彼女、久住は科学が生み出した物をその構造や原点をすぐさま明らかに出来る科学解読能力を持っているのである。

そんな久住は超田舎思考娘で、幼い頃から電子機器など触れた事もなかったのだが、とある人のすすめで1年前からコンピュータを使い始めたのである。そしてそれがきっかけで彼女は気付いてしまう。地球の全ての電子機器をコントロールするマザーコンピュータ、ミザーの存在に。

秋本久住、彼女の能力を知る者は彼女以外に世界に数人。彼女の親友、美紀。展開予測男、シロ。そして…

セカンド - プロローグ2、科学解読女（後書き）

ストーリーはもう最後まで考えましたが、執筆が進まない。

セカンド - 1、まずは予想通り

学校も終わった放課後、お呼ばれメールに従い、白井美紀しらい みきはすぐに久住の暮らす、久住の叔父の家を訪ねた。

久住の今年で70歳の（しかし見かけは30代くらいにしか見えな）叔父は（ある意味イタイタしいくらい）いい歳していつも夜遅くまで遊びまくっているので、久住はいつ訪ねても基本家に1人である。そしてそんな親友と美紀が会うのは実に1週間ぶりの事である。

「久しぶり久住、にしてもあなたが1週間も学校休むなんてね、インフルエンザ？」

インターホンも鳴らさず、ノックもせずに、まるで住居者かのように堂々と無断で家に入り、すぐ前のパソコンが6台も置かれた部屋にいる久住を見つけそんな声をかける美紀。

「1週間で久しぶりかな、まあ確かに私の感覚的にはおひさかな」パソコンの液晶に映る何やら文字でいっぱいウィンドウを閉じ、三角座りで、座るといふよりは乗っかっている回転イスを回し、美紀の方へと振り返る久住。

「何しろそれはそれはもう、1年間もの間、とても信じられなくて見て見ぬふりして、考えないようにしてて、頭痛くて、脳みそ壊れそうな、そんな核兵器まではいかないだろうけど、どっかの大統領にとつての石油くらい重大な、それでいてこの前ロードショーでやってたミイラの出て来るホラー映画より恐ろしい現実と向き合った1週間だったんだから」

まるで気違いな、明らかな興奮状態の久住がやっと黙ってから流れる少しの沈黙。

「えと、久住、ちょっと落ち着いたら」

「ええ、落ち着いた、意味不明でごめんね、どうやらほとんど寝ずにいたせいで軽いこっぴ」

喋ってる途中で寝るなんて事、現実にあるんだ。美紀はちょっとびっくりし、そしてニヤリとし親友に毛布をかけてやった。そしてそれから自宅の母に電話をかけた。

「あ、お母さん、明日休みだし今日は久住の家に泊まるね」

それから数時間、久住は起きず、ネットサーフィンを楽しんでいた美紀も眠たくなり、久住の隣に布団を敷き眠りについて。

美紀が久住の家に泊まるのはしょっちゅうなので久住の叔父ジョンソン（自称。久住も美紀も本名を知らない）も久住と一緒に寝ている美紀を見ても特に気にも止めない。

そしてさらに翌朝、美紀が6時くらいに目覚めた時、久住はまだ寝ていた。そしてジョンソンはすでに出かけていた。

美紀は久住の家に数着預けている服に着替え、歯を磨き、またネットサーフィンを始める。

「ん、うん」

「やっと起きた、久住」

久住が目覚めたのは昼頃だった。

「美紀、なん」

言葉を止め凄まじいスピードで思考を整理する久住。

「そうだ、美紀、大変なの、大変、とりあえずこれ見て」

言いながら美紀の使っているのは別のパソコンの電源ボタンを押し、スリープモードを解除する久住。パソコンの画面には電車の路線地図のようなのが映っていた。

「ティム・オライリーよろしくね」

「何か言った？」

「ううん、何も」

少し久住をからかう様子の美紀。

「で、これ何なの？」

改めて尋ねる美紀。

「これは、信じられない話になるわ」と久住。

一部の特別仕様物以外の地球上の全ての電子機器と繋がり、ひそかにコントロールするコンピュータ、ミーザ、の管理人であるケイトは大平洋の深海にあるミーザの設置された巨大施設を出てラスベガスのカジノで数日遊びまくり、そして帰ってきていた。

「おかえりケイト」

ミーザの点検をしているファイは、作業は続けたまま言った。

「ただいま、サリーは？」

「ちよつと気になる事があるからつて出かけてる」

相変わらず器用に作業を続けながら質問に即答するファイ。普段の彼からは想像も出来ないほどの働きっぷりである。

ファイとサリー、2人は、正確には1年前、所属する秘密組織ホツトを追い出されたファイは、彼に半ば無理矢理ついて来たサリーと一緒にケイトの所に来てミーザの管理を手伝っている。1年前なら考えられなかったであろう長期の外出が出来るのも彼らのおかげという訳である。

ちなみに2人の呼び名が今だにコードネームなのは2人が自分の本名を忘れている為である。

「ただいま」とケイトのすぐ後に帰って来たサリー。

「おかえり」

同時に振り返るケイトとファイ。

「最近退屈そうな2人にとってはいい報告かな、ちよつと厄介な事態発生」

サリーは微妙な笑顔でそう告げた。

「じゃあほとんどの電子機器には1つの共通のマザーコンピュータがあるつての？」

コクリと頷く久住。

「私、この1週間でその場所も突き止めたわ。アメリカ政府が指定したポイントX X 3 6 2 5 エリア、大平洋の底よ、私ここに行くと思うてるわ、でも私の能力があってもやっぱり危険はあるだろ

「うから美紀が行くかどうかは「行くわ」

久住を遮る美紀。

「それに大平洋の底って潜水艦を使わなきゃいけないしね」
ニヤリとする美紀の言葉に久住も笑みを浮かべる。

「ええ、これはあの川浦^{かわつら}への前の仕返しにもなるの」

何もかも予測通り、何もかも。

シロはシロの家で支度を始める。

「表舞台か」

何となく呟くシロ。

セカンド - 2、付き合いは慎重に

川浦 大地^{だいち}、世界でも有数の超大富豪、川浦家の1人息子でなぜか久住達と同じ学校に通っている同級生。

彼が夏休みの自由研究で美紀が作った船の玩具を笑ったのが1ヶ月前。そして、

「私達に仕返しとして私物の潜水艦パクられて大損害被るのが今って訳」

「誰に言ってるの？久住」

「ああ、やっぱあんまり興奮するもんじゃないね私、何でもない、何でもない」

川浦家の巨大な屋敷前での久住と美紀の会話。

「いい、敵のセキュリティは今から3分後狂う。その時私達は堂々とあいつの友達のふりして門から入る。そしてこれを設置してジ・エンドよ」

そう言って久住がポケットから取り出した物にニヤリとする美紀。

それはつまり久住が3日かけて開発した、ある、ミニ炎上ロケット風クルセイダークラッシュホットロッキマシン。

早い話がただのお手製花火である。しかもかなりしょぼい。

「まあ素人にしては凄いと思うわ」

美紀の言葉に満足顔の久住。

「それじゃ時間だし、そろそろ作戦開始ね」

家の門の前に現れる久住と美紀。

「すいません」

それとなく辺りに注意する門番男に堂々と声をかける久住。

「誰だい？」と笑顔の門番男。

「私達川浦君の同級生で友達なんですけど」

「ああ、ちよつと待って」

それから小さなカメラのような物を久住達2人に向ける門番男。

「ごめん、どうやら君達にこの門を通させる訳にはいかないようだ、ぼっちゃんの友達リストに乗っていないんで」

相変わらず笑顔だが明らかに警戒気味の門番男。
盲点だった。

いや、これは予測出来ないでしょ。

喋らず心で思っている事ではあるのだがなぜか通じ合う2人の親友とその時突然鳴り響く門番男のケータイ。

「はい、はい、わかりました」

そして電話を切る門番男。

「入ってください、それとずいぶんなご無礼、お許しを、ぼっちゃま直々のあなた方の紹介がありました。」

そんな訳で一応は計画通りに事がいった久住と美紀。

「あれ、久住がやったの？」

「違うわ、それに川浦のはずもないし、謎ね」

だがもうそれはどうでもよかった。川浦に恨みを持っている者は多いはずだし、誰かが手伝ってくれたとしてもおかしい話ではない。

「次は藤原由希」

近くのビルから花火をセットする久住達を双眼鏡で眺めていた、雨も降っていないのにカッパを来ていてマスクとサングラスで顔を隠している、いかにも怪しい男は呟いて、その場を立ち去った。

「思った以上にうまくいったわ」

潜水艦を海へと繋がる丸い海底扉の前へと移動させながらの久住の呟き。

もうとんとん拍子だった。うまくセキュリティをくぐり抜けて潜水艦の場所まで来たし、挑戦状の花火も残した。

「で向かう場所はとりあえず例のマザーコンピュータ？」

「ええ」

それから潜水艦のミサイルで扉を壊し海底へと出る久住達。

「奇妙な靴の目撃証言？」

「そつ、ゾクゾクドキドキするでしょ」

「まあ、それなり」

正直ゾクゾクはするがドキドキはしない。とファイは思う。別にどうでもいいのだけれど。

「でもその靴が本当に一年前のエイリアン達の残した作品でも」

「たいした事態じゃないわ、問題はこの映像、見て」

それから持ってきていたDVDをミーザのコンピュータの一つにセツトするサリー。

「ブルーレイじゃないんだ」

「察しな、人にはそれぞれ事情があるんだ」

まったく意味わからないが、ファイの悲しそうな言葉にとりあえず頷いておくケイト。

「でも待つてよファイ、やつ」

軽く思い直し、ちゃんとした理由を聞くこうとして出そうとした質問を思わず止めるケイト。

映像に映っていた靴、鮮やかに、やはり完全に生きているように動き回る靴。

「ねえ、これ誰が」

「不明、ネット上のあちこちで転がってたわ」

サリーの答にやっぱりといった感じのケイト。

「えと、でもこれがあの靴かも知れないからってそれ何か問題？」
サリーとケイトがなぜ深刻そうにしているのか全然わからないファイ。

途切れなく映像に映っている靴。そりゃこんな激しい動きをする靴がいて、ビデオカメラ持ってたなら、普通は撮りまくるだろう。途切れなく、

「あ、そっか」

そうだそれが問題なんだ、こんな激しい動きを途切れなく撮れる、

そんなのこの靴を知ってる者じゃなければとても無理だろう。誰かがあえて動く靴を撮り、

「何の為だ？」

「それがわからないのよ、でも何か」

一旦言葉を切り終わったDVDを停止させるサリィ。

「多分何か起ころうとしてる」

そして静まりかえる3人

「もう起こってるのかもね、誰か友達呼んだ？」

沈黙を破るケイトの突然の質問に同時に首を振るファイとサリィ。

「そつ、それじゃもう一つ質問、北の方から小型の潜水艦がまっすぐこっちに向かってるんだけど、知り合いだと思う？」

言いながらケイトはミーザのモニターに、もう間近に迫っていた久住達の潜水艦を映させた。

セカンド - 3、どこまでいっても不法侵入者

「で、これからどうするの？あれが多分その例のマザーコンピューターか、もしくはそれのある施設よね」

目の前のモニターに映る、潜水艦のすぐ前の施設らしき何かを指差し隣の親友に訪ねる美紀。

「まずは何かいり」

施設らしき何かから突然伸びてきた大きな機械の手に思わず言葉を止める久住。

「久住、これやばくないかしら？」

半分放心状態の美紀。

「ええ、速すぎる、とても逃げられないわね」

わりと冷静な久住が言い終わるか終わらない内に潜水艦は手に捕まれ施設らしき何かへと導かれた。

「また頭の痛くなる能力ね」

久住と美紀からここまでのいきさつを聞き、面倒くさそうに頭を抱えるケイト。

「言っておくけど久住の能力は本物よ」

自分の事のように誇らしげにニヤリとする美紀。

「まあここを個人で見つけた時点でそうだとはわかるわ」

何か落ち込んでいるようにも見えるサリィ。

「でもここに来た目的は？」

ケイトの問いに少し考え込む久住と美紀。

そつえばなぜだろうか？はつきり言っただてのコンピューターと密かに繋がっているマザーコンピューターがある。だからどうだというのか。自分達にはあまり関係ない話のはずである。どうでもいいはずである。

「興味、かな」

自分で自分の答を確認しているような言い方をする久住。

「正解」

別に近くにいる訳でも久住の言葉を聞いた訳でもないが、まるで彼女に反応したかのように呟くシロ。

彼がいるのは秘密の施設でも自分の家でもなく由希や翔の通う学校の隣の廃虚ビルだった。

「これが出来たのは、いえ考えられたのは相当な昔じゃないかしら、多分最初は何回か失敗して、わかるわ、その度に失敗は生かされてる。より完璧に人工的な意志を持たそうとしたけど辞めた。いつでもあらゆるコンピューターへ回避ウイルスを送ろうとしたけど辞めた。回避ウイルス？」

「本当に凄いわね」

ミーザを軽くいじりながら次々とそんなどこから引つ張り出したのかわからないその情報を言い当てて行く久住に素直に驚き、そしてなぜか嬉しそうなサリー。

ファイやケイトも何も言いこしなかったが心底驚いているのが誰の目から見ても明らかだった、が前からの付き合いの美紀だけは特に驚く事もなくニヤニヤしていた。

「ねえ回避ウイルスって？これはなぜかわかりそうもないわ、多分いくつかタイプがあるわよね」

「ああ、そうだね、なるほど面白いね、回避ウイルスはミーザ設計時に仮想的に考えられたウイルスでいくつかの形がある以外はまだ名前しか決められてなかった物さ。だからわからないのは当然、ていうよりもわかったら逆に矛盾さ」

久住の再度の問いにハッとして答えるファイ。

「へ？」

そして突然響くミーザの緊急事態お知らせ機能の警報にすぐそれに振り返る久住。

「私のせい？」

「いや違う、これって？」

「ハッキング？」

不安がる久住をよそに呟くファイとケイト。二人、正確にはサリーも入れて三人、の頭によぎる一年前の事件。

そして十秒ほどで正常なコントロールに戻るミーザ。

「どうやら敵の目的はデータを盗む事だったらしいね、盗まれたのはなんと一年前に入力されたミーザの中にあるありったけのカールの研究記録と、うん、僕らの戦いの記録だ、例の靴使いの宇宙人軍団との」

「カール？宇宙人軍団？」

「あなた達、ていうかあなた正常？」

まったく話を呑み込めない美紀と久住。

「確かに彼は、まあ」

残念そうに、しかしかなり楽しそうに実は恋人であるファイを横目で見るサリー。

「なんか話がそれそうだから私もちゃんと聞いとく、一年前のどうたらかんたらの話」

「そうね、あなた達ならほっておいても調べちゃいそうだし、それに悪い子達じゃなさそうだし教えてあげるわ」

そして一年前、一部の者が靴戦争と呼ぶ暗躍する変人達と宇宙人との戦いを覚えている限り正確に話して久住達に聞かせるケイト。

「うん、とても信じられないわ、つまりその兄さんだけじゃなくあなたもいかれてたって事？」

「まああなたも何も知らない人からしたらそんな感じだろうけどね」ものすごく的確な親友の突っ込みに黙らざるを得ない久住。

「わかった、わかったわ、全部信じる、そもそもこの存在自体最初はとても信じられなかったし。で、そのカール・ウェラーって人まだ生きてるんでしょ、連絡して心当たり調べないの？」

「もうすでにメールを送ったけど音信不通よ、彼じゃなくて彼の助

手にだけど、カールの連絡先は私達実は知らないの、ミーザには入れたくないんだって、大正解ね彼」

久住の質問に答えながらもミーザを隣で操作し、そのモニターに単純にハッカーの心当たりとカールへの連絡アドレスを尋ねた、送信したメール内容を表示させるサリィ。

「翔って人ね、由希って人には何も？」

「由希はパソコン持っていないしケータイにはミーザの構造上あまり送るべきじゃないしね」

「なぜ？」

ファイの説明に再度疑問の声をあげる美紀。

「簡単に言うとケータイだとケータイ会社とかに履歴が伝わっちゃうのをどうしようもないのよ、わりと最近出来たのはそうみたい」
答えたのは久住だった。

「メッセージ？」

学校を終えて、バイトを終えて、そして帰ってすぐ、どうせ月一回くらいしか利用しなくせに年中つけっぱなしの、実に電気代がもつたいないコンピューターに届いていたメールに面食らう翔。

そして開いたメールの差出人への質問の答、ハッカーの心当たりはないという事とカールの自分が知る唯一のメールアドレスを綴った返事メールを返そうとした翔。

「今は辞めた方がいい、というよりもさせない、というか辞めるな、俺はその事を知ってる」

背後からの突然の来訪者、悪く言えば謎の不法侵入者の声に送信ボタンをクリックする寸前だった手を止めて、振り向く翔。

「はじめまして、俺はシロ、偉大な科学の世紀の予言者様さ、まずは話を聞いてくれ」

そう言っただけでシロは不気味に微笑んだ。

セカンド - 4、恐怖の対象は人それぞれ

世紀の大予言者シロと名乗る男。ただしれぬ雰囲気、不思議な魅力を感じさせる男。

彼を見た時、翔の頭には二つの選択肢が浮かんだという。病院に電話するべきか？

警察に電話するべきか？

「お前は今日昼ご飯をカップヌードルのカレー味にするつもりだったろう、そして今警察にしよう」と決心決めた」

シロのにこやかな言葉に不覚にも驚いてしまった翔。

「お前は？」

「どう対応すれば信じてもらえるか、まともに話を聞いてくれるかはとづくに予測済みさ」

そう言つてさらに笑みを深めるシロ。

一方その頃、由希は家でテレビを見ていた、例によって家族は旅行中である。

そしてうとうとしかけていた彼は目の前のテレビが急に爆発したのにびっくりする。そりゃ目も覚めるだろう。

「ひっ」

そしてどこからか鳴り始めた凄まじい轟音に慌てて家の外に出る由希。

それはいわゆる間一髪というパターンだろう。彼が家を出た瞬間、家は見事なまでに近所には欠片もはじく事なく、綺麗にまつすぐ崩れさったのだ。

俺は家族に殺される。由希は心底そう思ったのだという。彼の家族っていったい…。

「じゃあ万能な能力じゃないのか？」

「ああ、そうゆう事になる」

それは世界全てに有効ではなく人に対して有効で、しかし絶対的というのは半分ほどで、それに予測が成功しても回避出来ない場合も多く、さらにまったくこの能力が適用出来ない人物もいるという。

シロが翔に説明した予測能力の説明はこんな内容だった。

「ちなみに適用出来ない人物は俺が把握しているだけで2人。1人は君も知ってるだろう、ファイとかいうちょっとしたクレイジー・ブレインだ」

なぜか凄まじく納得出来る人物、その名もファイ。本名ではないが、とにかくファイ。

「そしてもう1人、こいつは俺も名前も知らない、ただこいつの周りの人間からこの何者かが何かをしようとしてる事はわかってる、この地球にとってよくない何かをな」

「でも何でここに？」

彼の説明には納得したが、彼自身はまだ完全に信じていない翔。

「力を貸してほしい、翔、由希にも頼むつもりだ、ここには急いで来た、ミーザへのメールを止める為にな」

「もうネットは」

「危険なんだ、網が張られてる、それもよくわからないんだけどな」

翔の言葉に頷くシロ。

「由希の所に行こう」

「いや、その必要はないよ、もうじき彼はここに来るから」

そうしてまた笑みを浮かべるシロ。

「つまりこれは夢だな」

頭の中で思うはずがいついっかい呟いてしまう由希。

目の前の光景はそれくらい信じられなかった。

崩れた瓦礫から次々這い出てくる、いつか自分と一時ばかりの騙し合いを演じた靴形生物、と同じ見た目の数十体くらいの靴形生物達。

「みんなあいつのお友達？」

まったく反応なく、そしてピタリと動きを一瞬止める靴形生物達。
そして次の瞬間、まるでトビウオのように勢いよく自分に飛びかか
つて来た靴形生物達から、反応よくすぐさま逃げ出す由希。

「ご丁寧にびっくりしているご近所の皆さんには迷惑をかけないよ
うにうまく避けて追いかけて来る靴軍団。それは凄まじく早く由希
にはゆっくり後ろを確認している暇もなかった。」

「はあ、はあ」

「ご近所の路地、公園、林、神社を逃げ走り、さすがに疲れを隠せな
い由希。」

もうたかが靴だろ。

頭の中で自分で自分に活を入れ、そして反撃を決心し振り返る由希。
迫り来る今や百体はいるであろう靴軍団。

「今、無理」

叫び、反撃は諦めまた駆け出す由希。

そしてとある角を曲がった時、とっさに思いつきドブの溝に隠れる
由希。

どうやら靴はマヌケにも由希のダメ元作戦通りに彼を素通りしてし
まったようで、それからしばらくそこで臭い匂いに苦しむ彼が襲わ
れる事はなかった。

それから慎重にそこから出て、可能な限り気をつけながらとある家
に向かう由希。

そしてやってきた友人の家にインターホンもノックもなしに静かに
入る由希。

「タイミングばっちりだったろ」

出迎えてくれた友人にそう言ってニヤリと笑う知らない人物。

「あなたは？」

「シロだ。何にせよこれで役者は揃った」

そして今度は由希に向かいニヤリとするシロ。

「やっぱり何かあったのかしら」

返事を返えしてこない翔に心配を募らせるサリー。

「もしかしたら情報を盗んだ人、もしくは人達と何か関連があるかもね」

「その事なんだけど」

ファイの言葉に唐突にうんうん頷く久住。

「もしかしたらただけど私のせいがちよつとあるかも、私が少しでもミィザのセキュリティの目を引かせたから、その隙に」

「あなたを誰かが利用したって事？」

サリーの言葉に頷く久住。

「もしそうなら犯人はあなたの能力を知ってる人物かな」

「それなら大分絞られる、ていうか」

ケイトの言葉に返しながらも久住と目を合わせる美紀。

「うん、怪しい奴が1人いる」

頷き、呟く久住。

「怪しい奴？」とケイト。

久住は少し思ひ出すような仕草の後と言った。

「私にパソコンの事を教えてくれた先生、都筑研二つづき けんじよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0060/>

シューズウォーズ

2011年10月6日04時48分発行